新約全書　馬太傳福音書

第一章　アブラハムの裔なるダビデの主耶蘇キリストの系圖

二 アブラハム　イサクをうみ　イサク　ヤコブを生　ヤコブ　ユダと
その兄弟をうめり　三 ユダ　タマルによりてパレスとザラをう
みパレス　エスロンをうみ　エスロン　アラムをうみ　四 アラム
アミナダブをうみアミナダブ　ナアションをうみナアション
サルモンをうみ　五 サルモン　ラカブによりてボアズを生　ボアズ
ルツによりてオベデをうみ　オベデ　エッサイをうみ　六 エッサイ
ダビデ王をうむダビデ王　ウリヤの妻によりてソロモンを

うみソロモンレハベアムをうみレハベアムアビアをうみアビアアサをうみアサヨサパテをうみヨサパテヨラムをうみヨラムウヅヤをうみ
アカズをうみアカズヘゼキヤをうみヘゼキヤマナセをうみマナセアモンをうみアモンヨシアをうめりヨシアはバブロンとそのきやうだいたるころにバブロンへとうつされたりき
ヨシアヨアハズをうみヨアハズシアテルをうむシアテルエリアキムをうみエリアキムアゾルをうみアゾルザドクをうみザドクアキムをうみアキムエリウデをうみ
エリウデエリアザルマツタンをうみエリアザルマツタンヤコブをうみヤコブマリアのをつとヨセフをうめりこのマリアよりキリストととなへらるるイエスのうまれたまひしそのやうはこのごとくなりきそのははマリアはヨセフとめとはせられしがふたりのまだいつしよにならざるさきに聖霊によりてみごもれることあらはれたりヨセフはその人となりを

よこをとをつくしむることこのまん。ひそうよ離縁せん
とおもくり二十のくてこのことをありひめくらせるをりよ
主のつのひこのまつが夢よあらはれていひけるよ。ダビデのそ
ゑヨセフよあんぢ妻マリアをめとることをおそるゝなかれ。
そのもとめるところのものい聖靈よるあり二十一これ子に
うまんその名と耶蘇とあらべし。そいその民を罪よりも
くちんとものことこのこと預言者よりて
主のいひたまひしことを二十二處女もちみて子とうまんそ
の名とインマヌエルとあらべしとあるよ應驗せんためな
なり。その名をとけを神わがもとゝまをるとの義あり

二十四ヨセフねむりより起て主のつのひの命ぜしごとくさ
がびその妻をめぐりたまと二十五家子のうまるまで妹をと
もよせざりきそのうまれ子を耶蘇とあらけたり

第二章

二それ耶蘇いへロデ王のときユダヤのベツレヘムよ
うまれたまひしが。そのとき博士たちひがしのかたより
エルサレムよきたりて二ユダヤ人の王とそうまれ
たまくるものいづこよ在や。そをひがしのうちにてそ
の星をみそなをを拜せんためきたれり三ヘロデ王
これをきゝていうむまるエルサレムの民もるる然そへ
ての祭司のをさと民の學者とをあつめてヘロデそひける

ハキリストのうまるべきところいづこあらや 五
けるハユダヤのベツレヘムなり。そは預言者のもらされた
ることをよ ムダヤの地ベツレヘムよなんぢハユダヤの郡
中なりとも ちひさきものよあるを ダイステエルの民を
やしなふべき君そのうちよりいでん。といひたればなり
あいてヘロデひそかに博士たちをよび星のあらはれたる
きを詳よらひて、のちをつをベツレヘムにつかはしていひけるハ。ゆきて嬰兒のことをつぶさにたづねこうまたなんぢ
そも我もまつけよわれをもまゐりて拜をべし 九 この王の
命をきゝてゆきり。前よひがしにて星こうま

らにさゝきもちてをゝるまでのちところいまし
ましゝまゝぬ十二のれらこの星をみていろ
でる室よいりけるそ嬰兒のそのマリアとともにある
を見ひきふしてをゝるまでを拜し寶盒をひらきて黄金乳香
沒藥などの禮物をさゝげたり 十二 あくの夜夢にヘロデへの
もとにかへるなかれとの默示をうけもりほかの
みちよりその國にかへれり 十三 二のひとゝが去るのち、主の
つかひヨセフのいめにあらはれていひけるハ、ヘロデ
をさがしてこゝさんとをするゆゑ起てをゝるごとそのまゝ
とをたづさへエジプト
のくにへまかりてまでいよ。われなんぢにきゝまでこゝら

しばまも亦ヨセフ起きて夜ごとその母と
エジプトゆきヘロデの死るまでそこにまも主
のげんをやよりてわ亦子をエジプトより
いでよといひたまひしことこのまでせんためなり
ヘロデもとをあざむく人をつかはして博士
のりたる時をたしかにくひたる二歳ベツレヘム
とそのさかひのうちなる二歳一たのをことごと
くころせり
十八 エレミヤのこと
あげきこの声みづからラケル憂るら名ラマよきこうも
その子どもをなげきそのなぐさめよりて慰まぞと
いひしこのなくなりてヘロデもるしを
ヨセフのいめるエジプトにて嬰児とその母をたづさへてあるきたまひけるいまだ
兒のいのちをもとむるものや死ねこの声起てをさなご
ごとそのそとをたづさへてイスラエルの地よりくりしが
二十 アケラヲ父ヘロデよこのそりてエダヤの王たりときけ
亦そこへゆくことをおそるまた夢よつげをこうむり
てガリラヤのうちをさりけるナザルといへるむらにいたりて
をもとりこのをとナザレ人とよばれんと預言者によりて
たもてる言よこのあそせんためなり

第三章　その頃バプテスマのヨハネきたりてユダヤの野
に宣つたへていひけるは、天國いちじるし悔あらたためよ、こは
主の道をそなへその徑をなほくせよと野によばはる
人のこゑあり。と預言者イザヤがいひし人はこのヨハネ
なり。その身はらくだの毛衣をき腰にかはの帶をし
その食ものはいなごと野蜜をなりき。ここにエルサレムおよびユダヤ
全國およびヨルダンの四方よりひとびといでてヨハネに
つきその罪をくいあらはしてヨルダンにておのれにバプテスマを
うけたり。されどパリサイ人およびサドカイの人々のおほくきたりてバプテスマを
ことをこばむを見て

バプテスマをさづけん 十二 手に箕をもちてその禾場をきよめ麥をあつめてその倉にいれ糠は消ざる火にてやきつべし 十三 ○この時 耶蘇ヨハネよりバプテスマをうけんとてガリラヤよりヨルダンにきたりたまふ 十四 ヨハネ辭ていひけるは われ汝よりバプテスマをうくべきものなるに汝われにきたるか 十五 耶蘇こたへていひたまふ此は今のたまふべきなり。こはよろしきことをすべてせんがためなり 爰にヨハネ之をゆるせり 十六 耶蘇バプテスマをうけて水よりあがりたまふとき天たちまちにひらけたもまふことをみたまふに聖靈の鴿のごとくくだりてその上にとどまるを

聲ありてこはわがこころよろこぶわが愛子これなりといふをきく

第四章

一 さて耶蘇せいれんたちめより野にゆきたまひ惡魔にこころみられたまふ 二 四十日四十夜くらひたまはざりしのち餓ぬ 三 こころむるもののきたりていひけるは。もし神の子ならばこの石を餅となせといひつけよ。人はパンのみにて生るものにあらず神の口より出づる一切のことばによりて生るものなりと錄されたり 五 ここにおいて惡魔これを聖京にともなひゆき殿のいただきにたたせていひけるは もし神の子ならば己が身をなげよ。そは錄されたりあんぢがために神その使者たちに命

ぜんの如く手をそなへてあんぢの足の石をふまざるやうきつべしと。七耶蘇こゝろよいひけるハ。主たるあんぢの神をこゝろむべし。たゞこの主をいとたうとき山よたゞさゝゆき世界のそなぐと。まことこの主をいとたうとき山よたゞさゝゆき世界のそなぐと。その榮華をみせて九あんぢに拜せばこゝもをみなあんぢよ。十耶蘇こゝもをいひけるハ。サタンよさりぞけ。主たるあんぢの神を拜しただこゝもとのみつかふべしと。しかれば十一惡魔こゝもをさりぬ。○十二耶蘇ヨハネのとらへられたるを。天使たちきたりつかふ。○十三耶蘇ガリラヤよりゆき十四ナザレをさりゼブルンとネブタリとのさかひなるうみべのカペナウムよりゐりて。こゝふをり十五これ預言者イザヤのこゝもをいひたるごとし。ゼブルンの地ナブタリの地うみよそひたる地ヨルダンのむこふの地異邦人のガリラヤ十六こゝもとのくらきをる民ハおほいなる光をみ死地と死蔭よざをるものゝうへにひかりいでたりと。十七このときよりイエスこのまもせんたるあり。○十八こゝもとのうみべをあゆみて。天國ハちかづきたりと。十九耶蘇ガリラヤのうみべをあゆみてペテロといふシモンとその兄弟アンデレとふかうをなげて海にあみうてるをみたり。こゝもよいひけるハ。わをきたれ漁者となさん。二十

さぐ、わをあんぢ、らを人をそおとるものとまるさん 二 そのき
らやがて網をとゝて、耶蘇よりまさぐん 三 こゝろすりそみけ
るよまさぐほろの兄弟ふたり即ちゼベダイの子ヤコブ、そ
のきやうだいヨハネ父ゼベダイとともに舟にてあみをつ
くろへるをみこゝをよびたまひしに 三 この人ども舟と父
とをおきて耶蘇よりまさぐ、り○三 耶蘇がリラヤをあまね
めぐりてその會堂にをしへ天國の福音をのべつ
へこの民のうちなるもろ〳〵の病をすべてのわづらひをいや
したまふ 二四 その聲名あまねくスリヤぢうに人々をつ
てのわづらひ萬殊のやまひまさいなみものあ

るひは鬼につくのせたるものの癲癇ちもうふのやまひこの〳〵
をるものをことごとくつれきたりしかばこゝろよくなせり 二五 カリラヤ
とデカポリスエルサレムユダヤヨルダンのむこうより
ほろくの人々きたりしたがひき

第五章 耶蘇ほろくの人をみて山のほり坐したまひけるに
其門徒たちもそのもとにきたれり 二 耶蘇こゝろをひらきて
このとうとをしへいひけるは 三 心のまづしきものはさいはひ
あり天國はそのものなればなり 四 このなげ
くものはさいはひあり其のものはなぐさめをうべければなり 五 柔和
あるものはさいはひあり。そのひとは地土を嗣こと

をうべけをもあり六うゑへのごとくごとく義をもとめよものは
さいをひるりそのひとくに飽ことをうべけをびあり七あを
をみあるものは福ありそのひとは聆悟をうべけをびあり
へこころの清潔ものはさいをひるりそのひとは神をこころる
ことを得べけをびあり九和平をもとむるものはさいをひる
りその人は神の子とるべくらるべけをびあり十たゞしき
ことのたゝめよせあらるゝものは福ありてんこくはまるを
ちその人のものをもをりまた十ヶたゝめよ人あんぢらを詬
詩まゝ迫害いつまりてさまくのあしきことをいさん。その
しるきにあんぢらさいをひるりまた十よろこびたのしめ天よお

いてあんぢらの報賞おほけまをびあり。あんぢらうきき
きの預言者をもうゝせあたくあり。十四あんぢらは地のしほ
あり鹽もしそのあぢをうしなはゞ何をもてうもとくの味よ
のくさんのちは用ゐそとまてそとまてそ人さふまるの
ご十四あんぢらは世のひうをもあり山のうへにたてらるまちる
城はおうそうことをえそ十五燈をともして斗のしたにおく
そのおーの燭臺におきて家よちあるまべてのものをてらさん
十六このくのごとくひとぐのまへにあんぢらの光をうゞやう
せさをまはん人々あんぢらのよきおこなひをみて天をいの
をあんぢらの父をあがむべしーーを十七律法と預言者をも

つるためにきたりとおもふなかれ。
まつるにあらず。このくつて成全せん
んためにつげん。天地のつきざるうちは
もらげつくさぬことあり。十九このゆゑよく
誡のいとちひさきひとつをやぶり。まことにそのごとくに人ををしへ
あば天國において最小ものといはん。おほよそこの人をもつて
このものは天國において大なるものといはん。二〇われなんぢらにつげん。學者とパリサイ
の人のたゞしきよりもあんぢらのたゞしきことまさざるときは
かならず天國にいることをえず。二一なんぢ〇三いにしへの人に

つげて殺すことなかれ。ころすものは審判にあふべしといひ
つたふるをあるをおぼえん。二二われなんぢらにつげん。すべて兄弟を
もあんぢしりつげんをもつて故なくしてその兄弟をいかる
ものはさばきにあふべし。またその兄弟をばかものよ
とつぶやくものは集議にあふべし。またこのうつけものよ
地獄の火にあふべし。二三されば禮物
をたづさへて壇にゆきたるとき兄弟
ること、あるをおぼえば、二四そのそなへものをだ
のまへに留めおきてゆきて兄弟と和睦をなし後きたり
てあんぢのそなへものを獻よ。二五あんぢをうつたふるもの

ともよ途間よあるときもやくげよ。おそくいは訟
るものあんちをもくべやくよわくく審官まであんちをく
よやくよわくく遂よるんちいは獄よいもくれん三六もと
いくよるんちよつげん分釐までもつくのそざをバこのあらば
そこをいつることくあさたぎるるり〇三七いますくの人よつ
げて姦淫まることまるとをもといくるることあるバるんちらが
きてくそころるり三八さをもやくよるんちくよつげん。おほよ
そ婦をみて色情をおこさものはいまでよこのん
りんーたるるり三九そくぎの眼あんちを罪よおとさバぬ
きいざくてこをもをもてよ。そバ五體のひとつをうしなふよ

全身ぢごくよるげいをもるり四〇よりは右の
手るんちとつをよもくさバこらをきりてそをバ五體
のひとつをうしなふはぜんしんぢ地獄よりはまさをる〇四一まこいくるる
をいざさんとせバこをもて離縁状をあたふべしと四二さをと
もをるんちくまつげん。姦淫のゆゑをるくでそのつまをいさ
そものはこをよこのんいんるるくむるりぼまくいふさをた
る婦をめくるものも姦淫をおこさあるり〇四三またいます
へのひとつを告ていらたりの誓をたつることあるの主あんち
らちふくこころはこのるくバ主をあくべくくることあ

るハなんぢらがきゝしことゝころもあるべし　三四さるを我なんぢらにつげんさゝ誓ことなかれ天をさしてちかふなかれ神のくらゐなるゆゑ　三五地をさしてちかふなかれこれ神の足臺なるゆゑエルサレムをさしてちかふなかれ大王のみやこなるゆゑ　三六なんぢの首をさしてちかふなかれ一すぢの髪だも白くまたは黒くすることあたはざればなり　三七なんぢらのいふことはたゞ是々否々とせよこれよりいづるハ惡しきものなり　三八○目には目を歯には歯をつくのひかへたることあるべしと　三九なんぢらきゝしところなり　四〇されど我なんぢらにつげん惡しき者に敵することなかれ人なんぢの右の頬をうつときまた左のをもめぐらしてこれにむけよ　四一なんぢを訟へて下衣をとらんとするものにまた外服をもまかせとらせよ　四二人なんぢ一里の公役をおひおくることをしいなば二里ゆけ　四三なんぢに求るものにあたへ借んとするものをさりぞくるなかれ　四四○なんぢの隣をいつくしみてその敵をうらむべしといへることあるをなんぢらきゝしところなり　四五されど我なんぢらにつげん汝らの敵をいつくしみ汝らをのろふものを祝しなんぢらをにくむものを善視しなやめ迫害るものゝために祈禱せよ　四六これ天にいます

れるんぢら父の子となるなり。
日をよきものの上にもおしきものの上にもたゝしこのざるものを
白己をあいするものを愛するはいかほどの報賞かあらん。みな
つきとりもその兄弟のみをとふはいかほどの安否を兄弟のみをとふ
より人のまさりたることあらん。稅吏もかくせざるんや
四　このゆゑに天にいますなんぢらの父の純全がごとく
なんぢらも純全をつくせ

第六章

一　なんぢら人にみせんために
その義を人のまへに行ことをつゝしめ。さらば天にいますなんぢ
らの父よりむくいをえじ。二　このゆゑに施濟をなすとき人
のあがめをえんために會堂や街衢にて僞善者のごとく旅と
ふきるゝなかれまことにおんぢらにつけへ。この
ものはやそのたゞしきを人のまへにあらはさんとてなんぢらはほらを
るとき右の手のなすことを左の手にもかくせ。四　如
此もるゝはそのほどこしのなんぢが暗中
よろこびまふるんぢの父はあらはに報たまふべし。五　なん
ぢいのるときは僞善者のごとくするなかれ。この人は
みられんがために會堂や街衢のまがみたちていのることを
をこのむゝまことにおんぢらにつけん。そのものはすでに

その報賞をえさせり 六 あんぢいの密室よりて門をとぢてこのこもるよいまあんぢの父よいのみえざるよみたまふるよみるんぢの父は明顯よむくんたまへ 七 るんぢらいのるときい異邦人のごとくくりごとをのべ
るといよあつきをもてきくいれられんことをおもへりはこのゆゑよこのごとくするとあんぢらの父はねのたまふるさきよそのあつてるぬものをもとめたまへばるり 九 さまざまあんぢらこのくちびるくれくの父よねがのもくい聖名をあがめさせたまへ 十 神國をきたらせたまへ 聖旨の天よりあるごとく地よもあらせたまへ 十一 まん 十二 きょうのあたくしてるぬ糧をけふもあたへたまへ 十三 あんぢらの罪をゆるしのごとくわれらのつまざまをゆるしたまへ 十四 あくまより救いだしたまへ 十五 あんぢらもし人のつまざまをゆるさばあんぢの天父もまたあんぢをゆるしたまふべしもし人のつまざまをゆるさざればあんぢの父もあんぢらの罪をゆるしたまはざるべし 十六 あんぢら斷食するときに偽善者のごとく憂容をなすなかれ彼らは斷食するをひとに顯さんためなり顏色をそこ

なんぢら全身もまくらあきらこのあるべし　二三なんぢの目あしくして全身くらかるべし　このゆゑなんぢのうちの光くらかるべくばその暗さいかばかり大ならむや　二四人ふたりの主につかふることあたはず　そは或ひとりを憎みて他のひとりを愛こまたは一人をうやまひて他の一人をうとむべければなり　なんぢら神と財貨とにつかふることあたはず　二五このゆゑに我なんぢらに告ぐ　生命のために何を食ひ何を飲まんと思ひわづらふなかれ　身のために何を衣んとおもひわづらふなかれ　生命は糧よりまさり身は衣よりまさるものにあらずや　二六空の鳥をみよ　播かず　刈らず　倉に収めず　されど汝らの天の父これを養ひたまふ　なんぢらは之よりも遥かに優れるものにあらずや　二七汝らのうち誰か思ひわづらひて己が生命を一刻だに延べ得んや　二八また衣のために何ぞ思ひわづらふや　野の百合花の如何に生ふるかを思へ　労せず　紡がざるなり　二九されど我なんぢらに告ぐ　栄華をきはめしソロモンだにその服装この花の一つにしかざりき　三〇今日ありて明日炉に投げ入るる野の草をすら神かく装ひたまふ　まして汝ら小信の者よ　なほさらならずや　三一されば何を食ひ何を飲まんと思ひわづらふなかれ　三二これは皆異邦人の切に求むるところなり　汝らの天の父はこれらの物の皆なんぢらに必要なることを知りたまふ　三三まづ神の国と神の義とを求めよ　さらばこれらの物は皆なんぢらに加へ与へられん　三四されば明日のことを思ひわづらふなかれ　明日のことは明日みづから思ひわづらふべし　一日の苦労は一日にて足れり　七章　一なんぢら人をさばくな　なんぢらもさばかれざらんためなり　二なんぢらがさばくところのさばきにて汝らもさばかれ　なんぢらが人をはかるところのはかりにて汝らもはかられん　三なんぢ何ゆゑ兄弟の目にある塵を見るに　己が目にある梁木を認めざるや　四あるひは兄弟に向ひ　なんぢの目にある塵をとりのけんと言ふべきや　視よ　梁木なんぢの目にあるなり　五偽善者よ　まづ己が目より梁木をとりのけよ　さらば明かに見えて兄弟の目にある塵をとりのけ得ん　六聖きものを犬に与ふるな　また汝らの真珠を豚の前に投げ与ふるな　恐らくは彼らこれを足にて踏みにじり　かへりて汝らを噛み裂かん　七求めよ　さらば与へられん　尋ねよ　さらば見出さん　門を叩けよ　さらば開かれん　八すべて求むる者は得　尋ぬる者は見出し　門を叩く者は開かるればなり　九なんぢらのうち誰か子パンを求むるに石を与へんや　一〇魚を求むるに蛇を与へんや　一一なんぢら悪しき者ながらも善き賜物を子らに与ふることを知る　まして天にいます汝らの父は求むる者に善きものを与へたまはざらんや　一二されば凡て人になさんと欲することは汝らも人になせ　これ律法と預言者とに適ふ道なり　一三狭き門より入れ　滅に至る門は大きく　その道は広く　之より入る者多し　一四生に至る門は狭く　その道は細く　之を見出す者少なし　一五偽預言者を警めよ　彼らは羊の衣を着て汝らに来れども　内は貪婪なる狼なり　一六汝ら彼らをその果実によりて知るべし　人は荊棘より葡萄を　薊より無花果を摘むことあらんや　一七すべて善き樹は善き果を結び　悪しき樹は悪しき果を結ぶ　一八善き樹は悪しき果を結ぶことを得ず　悪しき樹は善き果を結ぶことを得ず　一九すべて善き果を結ばぬ樹は伐られて火に投げ入れらるればなり　二〇されば汝ら彼らをその果実によりて知るべし　二一我に向ひて主よ主よと言ふ者の皆が皆天国に入るにあらず　ただ天にいます我父の意を行ふ者のみ入るなり　二二かの日には多くの人我に向ひて言はん　主よ主よ　我らは汝の名によりて預言をなし　汝の名によりて悪鬼を逐ひ出し　汝の名によりて多くの能力ある業をなしたりしにあらずや　二三その時我かれらに明かに言はん　我なんぢらを知らず　不法を行ふ者どもよ　我を離れ去れ　二四されば我がこれらの言を聞きて行ふ者は皆　岩の上に家を建てし慧き人に譬へん　二五雨ふり　洪水いで　風吹きて　その家を撃てども　倒れざりき　岩の上に基礎を置きたればなり　二六我がこれらの言を聞きて行はざる者は皆　砂の上に家を建てし愚かなる人に譬へん　二七雨ふり　洪水いで　風吹きて　その家を撃てば　倒れてその倒れ方甚だしかりき　二八イエスこれらの言を語り終へたまひしとき　群衆その教に驚けり　二九イエスは律法学者らの如くにあらず　権威ある者の如く教へたまひしなり　八章　一イエス山より下りたまひしとき　多くの群衆従ひ来れり　二視よ　一人のらい病人来りてイエスを拝し　主よ　御意ならば我を潔くすることを得べしと言ふ　三イエス手を伸べ　彼に触れて　我意なり　潔くなれと言ひたまへば　直ちにその病癒えて潔くなれり　四イエス彼に言ひたまふ　慎みて誰にも言ふなかれ　ただ往きて己を祭司に示し　モーセの命じたる供物を献げて　人々に証をなせ　五イエスかペルナウムに入りたまひしとき　一人の百卒長イエスに来りて嘆願し　六言ふ　主よ　我が僕中風にて家に臥し　甚く苦しめらるるなり　七イエス言ひたまふ　我往きて癒すべし　八百卒長答へて言ふ　主よ　我は汝を我が屋根の下に入れまつるに足る者にあらず　ただ御言を下したまへ　さらば我が僕癒えん　九我も権威ある者の下に立つ者にして　我が下にも兵卒あり　一人に往けと言へば往き　他の人に来れと言へば来り　我が僕に此をなせと言へばなすなり　一〇イエスこれを聞きて驚き　従ひ来れる者どもに言ひたまふ　我まことに言ふ　我イスラエルの中にかばかりの信仰を見たることなし　一一我なんぢらに告ぐ　多くの人東西より来りてアブラハム　イサク　ヤコブと共に天国の宴席につかん　一二されど国の子らは外の暗きに逐ひ出されん　かしこにて泣きて歯がみすべし　一三イエス百卒長に言ひたまふ　往け　なんぢの信じたる如くなんぢになれかしと　その僕その時癒えたり　一四イエスペテロの家に来りたまひしとき　ペテロの姑熱を病みて臥したるを見たまひ　一五その手に触りたまへば　熱去りて彼起きイエスに仕へたり　一六夕になりて人々悪鬼に憑かれたる者を多くイエスに連来りしかば　イエス言をもて霊どもを逐ひ出し　病める者をことごとく癒したまへり　一七これ預言者イザヤによりて言はれたる事の成就せんためなり　曰く　彼は我らの病を負ひ　我らの患を担ひたり　一八イエス己が周囲に群衆のをるを見て　向こうに渡らんことを命じたまふ　一九ここに一人の学者来りてイエスに言ふ　師よ　我いづこに往きたまふとも　我は従ひ往かん　二〇イエス言ひたまふ　狐には穴あり　空の鳥には巣あれど　人の子には枕する所なし　二一弟子の一人イエスに言ふ　主よ　まづ往きて我父を葬ることを許したまへ　二二イエス言ひたまふ　我に従へ　死人をして己が死人を葬らしめよ　二三イエス舟に乗りたまひしとき　弟子ども従ひ来れり　二四視よ　湖に大なる風起りて　舟浪に蔽はるるばかりなりしに　イエスは眠りたまへり　二五弟子ども来りてイエスを起し　主よ　我らを救ひたまへ　我ら滅びんとすと言ふ　二六イエス言ひたまふ　なんぢら何ぞ信仰うすきや　ここにイエス起きて風と湖とを叱りたまへば　大なる凪となれり　二七人々怪しみて　この人は如何なる人ぞや　風も湖もこれに従ふにあらずやと言ふ　二八イエス向こうの地ガダラ人の地に渡りたまひしとき　悪鬼に憑かれたる者二人墓の間より出でてイエスに会へり　この者甚だ猛くして　何人もその辺を通ることを得ざりき　二九彼ら叫びて言ふ　神の子イエスよ　我らと汝と何の関係あるや　時いまだ来らざるに　ここに来りて我らを苦しめんとするか　三〇遠く離れて多くの豚の群飼はれたり　三一悪鬼イエスに願ひて言ふ　我らを逐ひ出したまはば　豚の群に往かしめたまへ　三二イエス言ひたまふ　往け　彼ら出でて豚に往けば　豚の群全体崖より湖に駆け下りて水に死ぬ　三三飼ふ者逃げ去りて町に往き　悪鬼に憑かれたる者どもの事を悉く告げたり　三四ここに町の人こぞりてイエスに会ひ　その辺を去りたまはんことを願ひ出でたり　九章　一イエス舟に乗りて湖を渡り　己が町に来りたまふ　二ここに人々中風の者を床に臥したるまま連来りしかば　イエスその信仰を見て　中風の者に　子よ　心安かれ　なんぢの罪赦されたりと言ひたまふ　三ここに学者ら心の中に　この人は神を涜すなりと言ふ　四イエス彼らの思ひを知りて言ひたまふ　なんぢら何ぞ心の中に悪しき思ひを懐くや　五なんぢの罪赦されたりと言ふと　起きて歩めと言ふと　何れか易きや　六されど人の子は地にて罪を赦す権威あることを汝らに知らせんために　中風の者に言ひたまふ　起きよ　なんぢの床を取りて家に帰れ　七彼起きて家に帰りぬ　八群衆これを見て恐れ　神かかる権威を人に与へたまひしことを讃めたり　九イエス其処を過ぎたまふとき　マタイといふ人の収税所に坐せるを見たまひ　我に従へと言ひたまへば　彼起きて従ひたり　一〇イエス家に食卓に着きたまひしとき　多くの収税人と罪人とイエスと弟子たちと共に食卓に着けり　一一パリサイ人これを見て　弟子たちに言ふ　なんぢらの師は何ゆゑ収税人と罪人とと共に食するや　一二イエス聞きて言ひたまふ　健かなる者に医者は要なし　要あるは病める者なり　一三なんぢら往きて　我が欲するは憐憫にして犠牲にあらずとの意を学べ　我は義人を招かんとにあらず　罪人を招かんとて来れるなり　一四ヨハネの弟子ら来りてイエスに言ふ　我らとパリサイ人とは断食をなすに　なんぢの弟子は断食をなさざるは何ゆゑなるや　一五イエス言ひたまふ　花婿の伴人は花婿と共にをる間は悲しむことを得ざるにあらずや　されど花婿奪はるる日来らん　その日には断食をなすべし　一六誰も新しき布を古き衣に継ぎあてず　その継ぎあてたるものは衣を引き裂きて　破れ更にひどくなるべければなり　一七また人は新しき葡萄酒を古き革嚢に入れず　入れたらんには革嚢破れて酒流れ出で　革嚢も亡ぶべし　新しき葡萄酒は新しき革嚢に入れよ　さらば両ながら保たるべし　一八イエスこれらの事を語りたまひしとき　一人の会堂司来りてイエスを拝し　我娘今死にたり　されど来りて手を彼に置きたまへ　さらば生きん　一九イエス起きて弟子たちと共に彼に従ひたまふ　二〇ここに十二年血漏を患ひたる女イエスの後に来りて　その衣の裾に触れたり　二一そは我ただ彼の衣に触れさへすれば癒えんと心に言ひたればなり　二二イエス振返りて彼を見たまひ　娘よ　心安かれ　なんぢの信仰なんぢを救へりと言ひたまへば　女その時より癒えたり　二三イエス会堂司の家に来りたまひ　笛吹く者どもと騒ぐ群衆とを見て　二四言ひたまふ　去れ　娘は死にたるにあらず　寝ねたるなりと　人々嘲笑へり　二五群衆を出だしたる後　イエス入りて娘の手を取りたまへば　娘起きたり　二六この事の風聞その地一帯に広まりぬ　二七イエス其処を去りたまふとき　二人の盲人イエスに従ひ来りて　ダビデの子よ　我らを憐れみたまへと呼ばはる　二八イエス家に入りたまひしとき　盲人ども来りてイエスに言ふ　我らこれを為し得ると信ずるか　彼ら言ふ　主よ　然り　二九イエス彼らの目に触りて　なんぢらの信仰に応じてなんぢらになれかしと言ひたまへば　三〇その目開けたり　イエス厳しく彼らに命じて　慎みて誰にもこれを知らすなと言ひたまへども　三一彼ら出でてイエスの事をその地一帯に言ひ広めたり　三二彼らの出でゆきたる後　悪鬼に憑かれたる唖者イエスに連来りしかば　三三悪鬼逐ひ出されて唖者物言へり　群衆驚きて　斯かることはイスラエルに未だ曾てあらざりしと言ふ　三四パリサイ人は　彼は悪鬼の長によりて悪鬼を逐ひ出すなりと言ふ　三五イエス諸の町村を巡りたまひ　その会堂にて教へ　御国の福音を宣べ伝へ　諸の病と諸の患とを癒したまふ　三六群衆を見て憐れみたまふ　そは羊飼なき羊の如く　疲れ倒れたればなり　三七ここに弟子たちに言ひたまふ　収穫は多けれども　働人は少なし　三八されば収穫の主に願ひて　その収穫のために働人を送りたまへと言ひたまふ　十章　一イエス十二人の弟子を召して　汚れし霊を逐ひ出し　諸の病と諸の患とを癒す権威を彼らに与へたまふ　二十二使徒の名は左の如し　第一はペテロと呼ばるるシモン　その兄弟アンデレ　ゼベダイの子ヤコブ　その兄弟ヨハネ　三ピリポ　バルトロマイ　トマ　収税人マタイ　アルパヨの子ヤコブ　タダイ　四熱心党のシモン　イエスを売りしイスカリオテのユダ　五イエスこの十二人を遣はすに当りて　命じたまふ　異邦人の道に往くなかれ　サマリヤ人の町に入るなかれ　六寧ろイスラエルの家の失せたる羊の許に往け　七往きて　天国は近づけりと宣べ伝へよ　八病める者を癒し　死人を甦らせ　らい病人を潔くし　悪鬼を逐ひ出せ　なんぢら無償にて受けたれば無償にて与へよ　九なんぢら帯の中に金　銀　銅を持つなかれ　一〇旅のために袋　二枚の下衣　履物　杖を持つなかれ　働人はその食物を受くるは当然なればなり　一一なんぢら何れの町村に入るとも　その中に誰か相応しき者あるを尋ねよ　その家を立ち去るまでそこに留まれ　一二その家に入るとき　平安あれと祝せよ　一三その家相応しくば　なんぢらの平安その家に来らん　相応しからずば　なんぢらの平安なんぢらに帰らん　一四誰にもせよ　なんぢらを受けず　なんぢらの言を聞かざる者あらば　その家を出でまたはその町を出でて　足の塵を払ひ落せ　一五我まことに言ふ　審きの日にはソドムとゴモラとの地の方その町の方より罰軽かるべし　一六視よ　我なんぢらを遣はすこと羊を狼の中に遣はすが如し　されば蛇の如く慧く　鳩の如く素直なれ　一七人に警めよ　そは人なんぢらを公会に渡し　その会堂にて鞭打つべければなり　一八なんぢら我がために総督と王との前に引かれ行き　彼らと異邦人とに証をなすべし　一九人なんぢらを渡すとき　何をいかに言はんかと思ひわづらふなかれ　言ふべきことは其時なんぢらに与へられん　二〇そは言ふ者はなんぢらにあらず　なんぢらの父の霊なんぢらの中にありて言ひたまふなり　二一兄弟は兄弟を死に渡し　父は子を渡し　子は父に逆ひて立ちて殺さしめん　二二なんぢらは我が名のために人に憎まれん　されど終まで忍ぶ者は救はるべし　二三人なんぢらを此の町にて迫害するとき　他の町に逃げ往け　我まことに言ふ　なんぢらイスラエルの諸の町を巡り終へざるに人の子来らん　二四弟子は師に勝らず　僕はその主に勝らず　二五弟子はその師の如くなれば足れり　僕はその主の如くなれば足れり　家の主人をベルゼブルと呼ばば　まして其家の人々をや　二六されば彼らを恐るるなかれ　蔽はれたるもの顕はれざるはなく　隠れたるもの知られざるはなければなり　二七我なんぢらに暗にて言ふことを明かに言へ　耳にて聞くことを屋上にて宣べ伝へよ　二八身を殺すとも霊を殺すこと能はざる者どもを恐るるなかれ　寧ろ霊と身とを地獄にて滅ぼし得る者を恐れよ　二九二羽の雀は一アサリオンにて売るにあらずや　されど汝らの父の許しなくては　その一羽も地に落つることなし　三〇汝らの頭の髪までも皆数へられたり　三一されば恐るるなかれ　なんぢらは多くの雀よりも優れたるものなり　三二されば人の前にて我を認むる者は　我も天にいます我父の前にて彼を認めん　三三人の前にて我を認めざる者は　我も天にいます我父の前にて彼を認めざるべし　三四我が地に平和を投ぜんために来れりと思ふなかれ　我は平和にあらず　剣を投ぜんために来れり　三五そは我が来れるは人をその父に　娘をその母に　嫁をその姑に逆ひ立たしめんためなり　三六人の仇はその家の者ならん　三七我よりも父または母を愛する者は我に相応しからず　我よりも息子または娘を愛する者は我に相応しからず　三八己が十字架を負ひて我に従はざる者は我に相応しからず　三九己が生命を得る者はこれを失ひ　我がために己が生命を失ふ者はこれを得ん　四〇なんぢらを受くる者は我を受くるなり　我を受くる者は我を遣はしたまひし者を受くるなり　四一預言者なるが故に預言者を受くる者は預言者の報を受け　義人なるが故に義人を受くる者は義人の報を受けん　四二誰にもせよ　この小き者の一人に弟子なるが故に冷水一杯を飲ませやる者は　我まことに言ふ　その報を失はざるべし　十一章　一イエス十二人の弟子に命じ終へたまひしとき　彼らの町々に教へ且つ宣べ伝へんとて其処を去りたまふ　二ヨハネ獄にてキリストの業を聞きしとき　弟子二人を遣はして　三来るべき者は汝なるか　我ら他の人を待つべきかと言はしむ　四イエス答へたまふ　往きてなんぢらの聞き且つ見る所を告げよ　五盲人は見　足なへは歩み　らい病人は潔くなり　聾者は聞き　死人は甦り　貧しき者は福音を宣べ伝へらると　六我に躓かざる者は幸福なり　七彼らの往きたる後　イエス群衆にヨハネの事を語りたまひ始めたまふ　なんぢら何を見んとて野に出でしや　風に揺らぐ葦にあらずや　八何を見んとて出でしや　美服を着たる人にあらずや　美服を着たる者は王の宮にをるなり　九何を見んとて出でしや　預言者にあらずや　然り　我なんぢらに告ぐ　預言者よりも優れたる者なり　一〇そは録して　視よ　我なんぢの前に我が使者を遣はす　彼なんぢの前に汝の道を備へん　と言はれたるはこの人のことなればなり　一一我まことに言ふ　女の産みたる者の中にバプテスマのヨハネより大なる者起りたることなし　されど天国にて最も小き者も彼より大なり　一二バプテスマのヨハネの時より今に至るまで天国は激しく攻めらるるなり　激しく攻むる者これを奪ふ　一三そは預言者と律法とはヨハネまで預言したればなり　一四なんぢら受けんと欲せば　彼は来るべきエリヤなり　一五聞く耳ある者は聞くべし　一六我この世代を何に譬へんか　それは広場に坐して　一七他の子らに呼ばはる子供の如し　曰く　我らは笛を吹きしに汝ら踊らず　哀歌を唱へしに汝ら胸を打たざりき　一八そはヨハネ来りて食はず飲まざりしに　悪鬼に憑かれたりと言ひ　一九人の子来りて食ひ飲みしに　視よ　大食漢　酒飲み　収税人と罪人との友なりと言ふ　されど智慧はその業によりて義とせらるるなり　二〇ここにイエス多くの力ある業の行はれたる町々を責めはじめたまふ　そは其処にて悔改めざりしによる　二一コラジンよ　汝は禍なり　ベツサイダよ　汝は禍なり　そは汝らの中にて行はれたる力ある業の　もしツロとシドンとにて行はれたりしならば　彼らは疾くに荒布を着　灰を被りて悔改めたりしならん　二二されど我なんぢらに告ぐ　審きの日にはツロとシドンとの地の方なんぢらより罰軽かるべし　二三カペナウムよ　汝は天にまで挙げらるるを望むか　陰府にまで下らん　そは汝の中にて行はれたる力ある業の　もしソドムにて行はれたりしならば　彼は今日まで存へたりしならん　二四されど我なんぢらに告ぐ　審きの日にはソドムの地の方なんぢより罰軽かるべし　二五その時イエス言ひたまふ　天地の主父よ　我なんぢを讃む　なんぢこれらの事を智慧ある者と慧き者とに隠して　幼児に顕はしたまへばなり　二六父よ　然り　これ御意に適ひたればなり　二七我が父は万物を我に委ねたまへり　父の外に子を知る者なく　子と子の顕はさんと欲する者の外に父を知る者なし　二八凡て労する者　重荷を負ふ者は我に来れ　我なんぢらを休ません　二九我は柔和にして心卑しければ　我が軛を負ひ我に学べ　さらばなんぢらの霊魂安きを得ん　三〇そは我が軛は易く　我が荷は軽ければなり　十二章　一その時イエス安息日に麦畑を通りたまふ　弟子たち空腹を覚えて穂を摘みて食ひ始めたり　二パリサイ人これを見て　イエスに言ふ　視よ　なんぢの弟子は安息日に為すべからざることを為すなり　三イエス言ひたまふ　ダビデその従者と共に飢ゑたりしとき　何を為したるかを読まざるか　四即ち神の家に入りて　祭司の外は己も従者も食ふべからざる供へのパンを食ひたるにあらずや　五また安息日には祭司は宮にありて安息日を犯すも罪なきことを律法にて読まざるか　六我なんぢらに告ぐ　宮よりも大なる者ここにあり　七我は憐憫にして犠牲にあらずとの意を汝らが学びたりしならば　罪なき者を罪ありと定めざりしならん　八そは人の子は安息日の主なればなり　九イエス其処を去りて彼らの会堂に入りたまふ　一〇ここに萎えたる手の人あり　ある人々イエスを訴へんとて　安息日に病を癒すは可なりやと問ふ　一一イエス言ひたまふ　なんぢらの中に一匹の羊を持つ者あり　その羊安息日に穴に陥らば　手を伸べてこれを引き上げざるべきや　一二人は羊よりも遥かに優れたるものにあらずや　されば安息日に善を為すは可なり　一三イエス萎えたる手の人に　手を伸べよと言ひたまへば　伸べたり　その手もとの如くに癒えたり　一四パリサイ人出でてイエスを殺さんことを謀る　一五イエスこれを知りて其処を去りたまふ　多くの群衆従ひ来りしかば　彼ら皆を癒したまへり　一六されど己を顕はすなと厳しく彼らに命じたまふ　一七これイザヤによりて言はれたる事の成就せんためなり　曰く　一八視よ　我が選びたる我が僕　我が愛する我が心喜ぶ者なり　我我が霊を彼に与へん　彼は異邦人に審きを示すべし　一九彼は争はず　叫ばず　その声を巷に聞かせず　二〇審きを勝利に導くまで　傷ける葦を折らず　煙る燈心を消さず　二一異邦人その名に望みを属けん　二二ここに悪鬼に憑かれたる盲唖者イエスに連来りしかば　イエス癒したまへり　その唖者物言ひ且つ見るに至る　二三群衆皆驚きて　この人はダビデの子にあらずやと言ふ　二四パリサイ人これを聞きて　この人は悪鬼の長ベルゼブルによりて悪鬼を逐ひ出すなりと言ふ　二五イエス彼らの思ひを知りて言ひたまふ　凡て内訌にて分れたる国は荒れすたれ　内訌にて分れたる町または家は立ち行かず　二六サタンがサタンを逐ひ出すならば　己に内訌にて分れたるなり　然らばその国いかで立ち行かんや　二七我もしベルゼブルによりて悪鬼を逐ひ出すならば　なんぢらの子らは何によりて逐ひ出すや　されば彼らはなんぢらの審きを為すべし　二八されど我もし神の霊によりて悪鬼を逐ひ出すならば　神の国既になんぢらに来れるなり　二九また人強き者の家に入りてその家財を奪はんには　まづその強き者を縛らざるべからず　然らばその家を掠むべし　三〇我と共にをらざる者は我に敵するなり　我と共に集めざる者は散らすなり　三一されば我なんぢらに告ぐ　人の凡ての罪と涜しとは赦されん　されど聖霊を涜す者は赦されざるべし　三二人の子に逆ひて言ふ者は赦されん　されど聖霊に逆ひて言ふ者は赦されざるべし　三三木を善しとせば　その果実も善しとせよ　木を悪しとせば　その果実も悪しとせよ　そは木はその果実によりて知らるればなり　三四蝮の族よ　なんぢら悪しき者ながら　何ぞ善きことを言ひ得んや　そは心に満つるものは口これを言ふなり　三五善き人は善き宝を心の善き倉より出し　悪しき人は悪しき宝を悪しき倉より出すなり　三六我なんぢらに告ぐ　人の言ふ凡ての無益の言は　審きの日にその言ひたる者ども皆その申訳をせざるべからず　三七そはなんぢの言によりて義とせられ　なんぢの言によりて罪せらるればなり　三八ここに学者とパリサイ人とイエスに答へて　師よ　我らは汝より徴を見んと欲すと言ふ　三九イエス答へたまふ　邪悪にして姦淫なる世代は徴を求む　されどヨナの徴の外は徴を与へられざるべし　四〇そはヨナ三日三夜大魚の腹の中にありしごとく　人の子も三日三夜地の中にあるべければなり　四一ニネベの人この世代と共に審きの時に立ちて　この世代を罪せん　そはヨナの宣教によりて悔改めたればなり　されど視よ　ヨナに優れる者ここにあり　四二南の女王この世代と共に審きの時に立ちて　この世代を罪せん　そは彼ソロモンの智慧を聞かんとて地の果より来りたればなり　されど視よ　ソロモンに優れる者ここにあり　四三汚れし霊人より出でて　潤ひなき処を過ぎ憩ひを求めて　これを得ざるときは　四四言ふ　我が出でし我家に帰らんと　往きて見るに空にして掃除し飾りあり　四五ここに往きて己より悪しき他の霊七つを伴ひ来り　入りて其処に住む　その人の後の状態は前よりも悪しくなるべし　この悪しき世代もまたかくの如くならん　四六イエスなほ群衆に語りたまふ時　その母と兄弟とイエスに語らんとて外に立てり　四七ある人イエスに言ふ　視よ　なんぢの母と兄弟とは外に立ちて　なんぢに語らんとす　四八イエス答へて言ひたまふ　我が母とは誰ぞ　我が兄弟とは誰ぞ　四九弟子たちを指して言ひたまふ　視よ　我が母　我が兄弟　五〇そは我が天にいます父の意を行ふ者は　我が兄弟　我が姉妹　我が母なればなり　十三章　一その日イエス家を出でて湖のほとりに坐したまふ　二ここに群衆集まりしかば　イエス舟に乗りて坐したまひ　群衆は皆岸に立てり　三イエス多くの事を譬にて彼らに語りたまふ　曰く　四視よ　種蒔く者蒔きに出でたり　蒔くとき　或種は路傍に落ちて　鳥来りて食ひ尽せり　五或種は土の浅き石地に落ちて　土の深からざるによりて直ちに萌え出でたれども　六日昇りて焦げ　根なきによりて枯れたり　七或種は茨の中に落ちて　茨伸び上りて塞ぎたり　八或種は良き地に落ちて　或は百倍　或は六十倍　或は三十倍の実を結べり　九聞く耳ある者は聞くべし　一〇弟子たち来りてイエスに言ふ　なんぢは何ゆゑ譬にて彼らに語りたまふや　一一イエス答へて言ひたまふ　天国の奥義を知ることは汝らに許されたれども　彼らに許されざればなり　一二そは凡て有つ者は与へられて愈豊かになるべく　有たざる者は有つ所をも取り去らるべければなり　一三我が彼らに譬にて語るは　彼らは見れども見ず　聞けども聞かず　また悟らざればなり　一四イザヤの預言は彼らによりて成就せり　曰く　汝らは聞けども悟らず　見れども見ざるべし　一五そは此民の心は鈍くなり　その耳は聞くこと重く　その目は閉ぢたればなり　恐らくは目にて見　耳にて聞き　心にて悟り　翻りて我に医されんことなし　一六されど汝らの目は見るが故に幸福なり　汝らの耳は聞くが故に幸福なり　一七我まことに汝らに告ぐ　多くの預言者と義人とは汝らの見る所を見んと欲せしかども見ず　聞く所を聞かんと欲せしかども聞かざりき　一八されば種蒔く者の譬を聞け　一九凡て御国の言を聞きて悟らざる者には　悪しき者来りてその心に蒔かれたるものを奪ふ　これ路傍に蒔かれたる者なり　二〇石地に蒔かれたる者とは　御言を聞きて直ちに喜びて受くる者なり　二一されど自己に根なくして暫く堪ふるのみなれば　御言のために艱難または逼迫起るとき　直ちに躓く者なり　二二茨の中に蒔かれたる者とは　御言を聞くなれども　この世の思ひ煩ひと富の惑はしとが御言を塞ぎて　実を結ばざるに至る者なり　二三良き地に蒔かれたる者とは　御言を聞きて悟る者なり　これ実を結びて或は百倍　或は六十倍　或は三十倍の収穫をなすものなり　二四イエス他の譬を彼らに示して言ひたまふ　天国は人その畑に善き種を蒔きたるに譬へん　二五人の眠りをる間にその仇来りて麦の中に毒麦を蒔き去りぬ　二六苗生ひ出でて穂を結ぶに及びて毒麦も現はれたり　二七家の僕ら来りて家の主人に言ふ　主よ　なんぢは畑に善き種を蒔きたりしにあらずや　毒麦は何処より来りしや　二八主人言ふ　仇の為せしことなり　僕ら言ふ　なんぢ往きてこれを抜き集めんことを我らは望むや　二九主人言ふ　否　毒麦を抜き集むるとき　誤りて麦をも抜き去らんことを恐る　三〇刈入れまで両ながら育つに任せよ　刈入れの時我刈る者に言はん　先づ毒麦を抜き集めて焼くために束に束ねよ　麦は我が倉に収めよと　三一イエス他の譬を彼らに示して言ひたまふ　天国は芥種の一粒を人その畑に蒔きたるに譬へん　三二この種は凡ての種の中にて最も小けれども　生長すれば野菜の中にて最も大くなり　木となるに至りて空の鳥来りその枝に宿るなり　三三イエス他の譬を彼らに語りたまふ　天国はパン種を三斗の粉の中に入れたるに譬へん　遂に全体膨れたり　三四イエス凡てこれらの事を譬にて群衆に語りたまふ　譬にあらざれば彼らに語りたまはざりき　三五これ預言者によりて言はれたる事の成就せんためなり　曰く　我口を開きて譬を語り　世の創より隠されたる事を言ひ出でん　三六ここにイエス群衆を去らせて家に入りたまひしとき　弟子たち来りて　畑の毒麦の譬を我らに説き明かしたまへと言ふ　三七イエス答へて言ひたまふ　善き種を蒔く者は人の子なり　三八畑は世なり　善き種は御国の子らなり　毒麦は悪しき者の子らなり　三九これを蒔きし仇は悪魔なり　刈入れは世の終なり　刈る者は御使たちなり　四〇されば毒麦の抜き集められて火に焼かるるごとく　世の終にもかくの如くならん　四一人の子その御使たちを遣はさん　彼ら御国の中より凡て躓きの因となる者と不法を行ふ者とを集めて　四二火の燃ゆる炉に投げ入れん　彼処にて泣きて歯がみすべし　四三その時義人は父の国にて日の如く輝かん　聞く耳ある者は聞くべし　四四天国は畑に隠されたる宝に譬へん　人これを見出して隠し　喜びてその往きて持てる凡てを売りて　その畑を買ふ　四五また天国は良き真珠を求むる商人に譬へん　四六彼一つの価高き真珠を見出すや　往きて持てる凡てを売りてこれを買ふ　四七また天国は海に投げ入れて凡ての魚を集むる網に譬へん　四八網の満つるとき　人これを岸に引き上げ　坐して善きものを器に収め　悪しきものを棄つ　四九世の終にもかくの如くならん　御使たち来りて義人の中より悪人を分ち　五〇火の燃ゆる炉に投げ入れん　彼処にて泣きて歯がみすべし　五一イエス言ひたまふ　なんぢら凡てこれらの事を悟りしか　彼ら言ふ　然り　五二イエス言ひたまふ　されば天国の学者となりたる凡ての学者は　己が倉より新しきものと古きものとを出だす家の主人に譬へん　五三イエスこれらの譬を語り終へたまひしとき　其処を去りたまふ　五四己が郷に来りたまひ　彼らの会堂にて教へたまへば　彼ら驚きて言ふ　この人かかる智慧と力ある業とを何処より得たるや　五五この人は大工の子にあらずや　その母はマリヤと呼ばれ　その兄弟はヤコブ　ヨセ　シモン　ユダと呼ばれ　五六その姉妹は皆我らと共にをるにあらずや　この人かかる事を凡て何処より得たるや　五七彼らイエスに躓けり　イエス言ひたまふ　預言者は己が郷と己が家とのほかにては尊ばれざることなし　五八彼らの不信仰のゆゑに其処にて多くの力ある業を行ひたまはざりき　十四章　一その時分領主ヘロデ　イエスの風聞を聞き　二己が僕らに言ふ　これバプテスマのヨハネなり　彼死人の中より甦りたるなり　されば力ある業彼の中に行はるるなりと　三ヘロデ　ヨハネを捕へ縛りて獄に入れたりしが　これ己が兄弟ピリポの妻ヘロデヤのゆゑなりき　四そはヨハネ彼に言ひけるは　なんぢ彼を妻とすることは宜しからずと　五ヘロデ彼を殺さんと欲せしかども　群衆を恐れたり　そはヨハネを預言者と思ひたればなり　六ヘロデの誕生日の祝ひに　ヘロデヤの女その中にて舞ひてヘロデを喜ばせたれば　七彼女に誓ひて　何にても汝の求むるものを与へんと言ふ　八女その母に教へられて言ふ　バプテスマのヨハネの首を盆に載せて我に与へたまへ　九王憂へたれども　誓ひたることと　また共に席に着く者どもの手前とにより　与へよと命じ　一〇人を遣はしてヨハネを獄にて斬らせたり　一一その首を盆に載せて持ち来りて女に与へ　女これを母に与へたり　一二ヨハネの弟子ら来りてその屍を取り葬り　往きてイエスに告げたり　一三イエスこれを聞きて舟に乗りて其処を去り　ひとり寂しき処に往きたまふ　群衆これを聞きて　諸の町より徒歩にて従ひ来れり　一四イエス舟より上陸して大なる群衆を見　彼らを憐れみて　その病者を癒したまへり　一五夕になりて弟子たち来りてイエスに言ふ　此処は寂しき処にして　時既に過ぎたり　群衆を去らせて村々に往かしめ　己が食物を買はしめたまへ　一六イエス言ひたまふ　往くに及ばず　なんぢら彼らに食物を与へよ　一七彼ら言ふ　我らここに五つのパンと二匹の魚とのほかは持たずと　一八イエス言ひたまふ　それをここに我に持ち来れ　一九群衆に草の上に坐すことを命じ　五つのパンと二匹の魚とを取りて　天を仰ぎて祝し　パンを裂きて弟子たちに与へ　弟子たちは群衆に与へたり　二〇皆食ひて飽きたり　残りし屑を集めて十二の籠に満ちたり　二一食ひたる者は婦人と子供とのほかに男五千人ばかりなりき　二二イエス直ちに弟子たちを強ひて舟に乗せ　己が先に向こうに渡らせ　その間に群衆を去らせたまふ　二三群衆を去らせ終へて　祈らんとて山に登りたまふ　夕になりしかば　ひとり其処にをりたまふ　二四舟は既に陸を遠く離れたり　風逆なりしかば　波に悩まされたり　二五夜明方イエス湖の上を歩みて彼らに近づきたまふ　二六弟子たち湖の上を歩むイエスを見て　狼狽へて　幽霊なりと言ひ　恐れて叫びたり　二七イエス直ちに彼らに言ひたまふ　安かれ　我なり　恐るるなかれ　二八ペテロ答へて言ふ　主よ　汝ならば我に命じて水の上を歩みて汝の許に来らせたまへ　二九イエス来れと言ひたまへば　ペテロ舟より降りて水の上を歩みてイエスの許に来る　三〇されど風を見て恐れ　沈み始めて　主よ　我を救ひたまへと叫ぶ　三一イエス直ちに手を伸べて彼を捕へ　信仰うすき者よ　何ぞ疑ひしやと言ひたまふ　三二二人舟に乗りたまひしとき　風やみたり　三三舟の中にをる者ども　イエスを拝して　まことに汝は神の子なりと言ふ　三四彼ら湖を渡りてゲネサレの地に着けり　三五その地の人々イエスと知りて　その辺一帯に人を遣はして　凡ての病者を連来らしめ　三六ただその衣の裾にだに触れさせたまへと願ひたり　触れたる者は皆癒されたり　十五章　一ここにエルサレムよりパリサイ人と学者とイエスに来りて言ふ　二なんぢの弟子は何ゆゑ古人の伝へを犯すや　そは食事をなすとき手を洗はざればなり　三イエス答へて言ひたまふ　なんぢらは何ゆゑ己が伝へによりて神の誡命を犯すや　四そは神は言ひたまへり　父と母とを敬へ　また父または母を詈る者は必ず死に定めらるべしと　五されどなんぢらは言ふ　人もし父または母に向ひ　我より汝に与へんはずの物はコルバンなり　即ち神への供へ物なりと言はば　六その父または母を敬ふことを要せずと　かくなんぢらは己が伝へによりて神の言を空しくせり　七偽善者よ　イザヤはなんぢらの事を預言して　曰く　八この民は口にては我を敬へども　その心は我より遠く離れたり　九彼らが我を拝むは空しきなり　その教ふるところは人の戒命のみなりと言ひたるは誠なるかな　一

倉よたくはふることをなー。もろもろのなんぢらの天の父いこ
ゐをやーおびたまふ。なんぢらいづれよりもおほいよきも
のぢやことのあらぢや 三 なんぢら誰かよく一尺のものを
てそのいのちを寸陰ものべえんや 六 またなんぢらなぜ衣の
ことをおもひわづらふや。野の百合花いかにしてそだつ
るをおもへ。勞ぜず紡がざるあり 元 ときどきまでもなんぢらにつげん
ソロモンの榮華の極のときだにもこの花のひとつほどもよ
そほりき 三 神いけば野のありてあす爐にまげいるる
る草をもこのごとくよそほせたまふべきにいまだしてるんぢらをやあ
信仰うすきものよ 三 さればなんぢらなにを食ひなにを飲るまを
衣人とてなにをおもひわづらふるな 三 ことをみる異邦人のごと
むるものあり。なんぢらの天の父いまをべてこれらのものをな
なくてならぬことをしりたまふべし 三 まづ神の國
とその義とをもとめよ。さらばこれらのものになるるんな
らまた加へらるべし 三 このゆゑに明日のことをおもひわづら
ふるな。明日は明日のことをおもひわづらへ。一日の苦勞
はいいちもちにて足れ

第七章

人のつみをさばむることなかれ。おそらくはなんぢ
らもまたさばめられん 二 なんぢらが人をさばくところにて
ごとくおのが罪をもさだめらるべし。なんぢらが人を量ご

くゝおのれもそうろうべし　三なんぢ兄弟の目にあるちりをこそておのが目にある梁木をもとゞざるいかんぞや　四おのれの目にうつたりのあるによいくで兄弟にむくひてなんぢが目にある物屑をとらせよといふことをえんや　五偽善者よまづおのれの目より梁木をとりさらばよく兄弟の目のちりをとることをえん　六犬に聖物をあたふるなかれまた豚のまへに珠をなげあたふることなかれおそらくは足にてこれを踐たりかへりてなんぢらをかみやぶらんことを　七求よさらばあたへられん尋ねよさらばあひ門をたゝけよさらばひらかれん　八

すべて求る者は得　すべて尋ぬるものはあひ　門をたゝくものにはひらかれん　九なんぢらのうち誰かその子パンをもとめんに石をあたへんや　十また魚をもとめんに蛇をあたへんや　十一されば善きものあたふることを知る父はなほさら天にいますなんぢらの父はもとむるものによきものをあたへたまはざらんや　十二人にせられんと思ふことはなんぢもまた人にそのごとくせよこれ律法と預言者とをおこなふなり　十三せまき門より入れ滅にいたる門は大きくその路はひろくてこれより入るものおほし　十四生にいたる

たるみちハせまくその門ハさひしくその路をうるものまれなり〇一四 いつそうの預言者をつくりめよこのをつくハ綿羊のそでさまてあんぢうちきてきたるとも内ハあらき豺狼なり一五 こゝをその果よりてちうべし 誰ゐいばらより葡萄とあざみより無花果をとることをせんさるぞ善樹いよき果とむさをびあしき樹にあしき惡果をむさをんぴあしき樹ハよきみをむさをふ一八 よき樹のよきみをむさをふことあたハずあしき樹のあしきみをむさをふ一九 おほよそよきみをむさをざる樹ハきられて火にいるなり二〇 されバ汝らかれらをその果よりてしることをうべし 二一 我にむかひて主よ主よといふものみな天國にいるにあらず唯わが天にいます父の旨をおこなふものなり二二 その日おほくの人われにむかひて主よ主よ我ら汝の名によりて預言をなし汝の名によりて鬼をおひ出し汝の名によりて異能をおほくおこなひしにあらずや二三 その時われ明にかれらにいはん我なんぢらをしらず惡をおこなふものどもよ我をはなれさりしかと二四 ゆゑにわがこれらのことばをきゝておこなふものを磐のうへに家をたてたる慧き人にたとへん二五 雨ふりおほそゝいでかぜふきてその家をうてどもたふれずこハいはをもてその根基をすゑたるによりてなり二六 われこれらのことばをきゝておこなハざるものをハ

ぞをきゝておこるのを沙のうへの家をたてゝよる
ねんごろのある人よたゝくんもあめふりあらしありて
てその家をうてばつひにたふるゝおとおほいなり
三 耶蘇こゝろのことを言竟たまふときあつまりたる人
をそのをしへをあやぶろきあやしみ 二九 學者のごとくあら
ず權威をもてるものゝごとくをしへたまふなり

第八章

耶蘇やまをくだりしときおほくの人々これをしたがふ
ろ 癩病のものきたりて拜しをひけるに主よこゝ
ろよくあふときよきいやしをきよくなしたまへ
べうもとつけてわがきよくなるをといひけるに
三 耶蘇手をのばしてかれにさはりて我こゝろよくなる
ばらいびやうたゞちにきよまれり 四 耶蘇これにいひけるは
愼て人につぐるなかれたゞゆきておのれをさいしに
つモーゼが命せしそなへものをゝくりてかれらのために
せよ 五 耶蘇カペナウムにいりたまふときひやくふの長きたりねがひ
ていひけるは 六 主よわがしもべ癱瘋をやみ家にふしてい
とくくるしむ 七 耶蘇いひけるはわれゆきてこれをいやさん
べし 八 百夫の長こたへていひけるは主よわれをるの
をわが家裏にいれまつるにあたはずたゞ言をいだし
たまへわがしもべすこやかになるべし 九 そはわれも人の權威の下にあ
るものにしてわがもとに兵卒ありてこれにゆけといへ

へをゆき、このまよきくをきゝ、いくたの我〻のごとき」をなせといへをもるもも行かやあり十 耶蘇こをきゝてあやーこそぐる人々よいひけるハ。わをまことよあんたらよつげんイスラエルのうちだよかまふこうる篤信よおゝそまるるり十二 そ」るんむゝのひとりバ東より西よりきゝりて アブラハム イサク ヤコブ ゝるよ 天國よぎー十三 國の諸子いそとのくらいぐさ」そこよてうるをーこ切齒そゝこおゝんの十四 耶蘇いやーまんの長ゆけるんむゝ信仰ぼぱゝ成おーこいひたまくるそのときよ僕いいをゝり〇書 耶蘇ペテロの家よりそ

のをうこめの熱をサゞゝひふーみゝるそゝきりけをまをるのも熱きゝひふをたるーきひゝゝ鬼よつきゝりけをバ耶蘇こゝをそゝをこゝくいやせり十四 預言者イザヤよりてみつこのわをゝの恙をうけまゝの病をあふそいひたまひーまこのかゝせんごがためをり〇十五 さそ耶蘇おほゝの人々のものをめゞまるをみて門徒よ命じひーよ十六 ある學者きゝりていたまふこもまをゝそんゝ耶蘇こをよいひけるハ師よりふくゆきひけるハ狐あ

おこりそらの鳥ハきをおりさえ
ろをー三 まごでーのひとりいひけるハ主よまづ
をさきうもむることをゆるせ 三 耶蘇いひけるハそれよ
あらゆる死たるものハそのをのれをうもむらせよ ○
三 耶蘇ふねよのりけるを門徒たちもこれをしたがふ 二四 こ
のときおほいなる颶風おこりて船をおほひたりうる浪
たちもー耶蘇ハいりたり 二五 でーたちこれをよちっづきてお
こしいひけるハ。主よをすくひたまへまをろぼびんとそ 二六
耶蘇こたへていひけるハ信仰うすきものよなんぞおそる
るやうひよおきて風と海とをいましめけれバおほいなお

ざやうよありぬ 二七 人々あやしみていひけるハいかふうな
る人ぞこのせもうみもこれをよちがひたり ○ 二八 耶蘇
のきーるガダラ人の地よいたりしときー鬼よりとりつかれ
たるふたりのその墓よりいでてきたりしかバいとあらび
そのみちを人のをふることあたハざるほどなりき 二九 こを
ーほどなり こをさけびていひけるハ神のこ耶蘇よこゝ
らんぢとをんの與あらんやいまだ時いたらざるにさきだ
ちをせをんこゝよきたりしかと 三〇 そのおほくの豕のむれ
くのむをを食ーみけるぞ 三一 耶蘇よねがひていひけるハ
こをーをとをくバ豕のむれよいること

をゆるせ三こゝをもてゆひけるといひけをゞ鬼いでゝふるさのむ
をてよいつゝまをゞての群さゝりこのけて海よりり水よを
ゝゝり三牧者どもゝゝよにげゆきてこのこゝ鬼よつゝ
をゝゝりゝゝのゝこゝをつゞげゝゞ三耶蘇よあるんとて邑
のゝのこゝぞりていできゝりこゝをゝ見てこの境をいでんこ
ゝゝをねがへり

第九章

耶蘇ふねよのりわたりて故邑よいゝりけをゞ二癱
瘋ゝて床よふゝたるものとひゝゞ昇きゝをり。耶蘇こゝをゝ
ゞ信ぜるをゝてちゝうぶのものよいひけるは。子よこゝろ
やそうをゝんちの罪ゆるさをてり三ある學者たちこゝろ

のうちよいひけるは。この人はけがをことをゝり四耶蘇
そのおもひをちりていひけるは。なんぢら心よ
惡をおもふやエなんぢの罪ゆるさをてりといふことと
ゆめといふこといづれやき五そも人のこ地よてつきを
あるその權あることをなんぢらよしらせんとてつひこ癱
瘋のものよおきてねどいをとり家よこうゝをゝぬ六人々こをゝ
おきてその家よこうゝぬ人々こをゝをゝてあやしみ
のごとき權を人よたまひし神をあがめたり七耶蘇こゝ
よりさりてみちよタイといふる人の稅關よざゝるをゝ
をゝていひけをゞ起てたゞくり八耶

鮮このをぢがいへより食まるるとき稅吏つとめある人ありきたりて耶蘇ゆびそのでしとともによざーけをバパリサイの人こゝろをこうてその門徒にいひけるハ。あんちゝの師ハるこゆゑ汝らつぎとりや罪ある人とともに食まるよ　十二　耶蘇きゝてこの言にいひけるハ。をゝやまるものハ醫士のたゞけをまもとめぞたゞ病あるものこゝろをもつむ　十三　祭祀をこのまびとはゆきてまなぶべし。そもそもそのきたるハたゞしき人をまねくにあらずあしき罪おるひとをくいあらたなるさせんがためなるり　十四　そのときヨハネのでし耶蘇よきてりていひけるハ

まもとパリサイの人ハあまたくしばきせざるハなぜや　十五　耶蘇こうたまふ師のでーのたんの友そのまるむことともをるうちハこうふーむことえんや將來まるむことひきとらるる日きたらんときハ斷食まぐまるう　十六　まあたゞきぬの布をまてふるまき衣をつくろふものいあらんとそハ補ふりそのの綻ものこゝろまをふはぐしのらんまたあらたきぶどう酒をふるまきこのそぶどうあるいはぶどう酒のをいあらんとものいあらたきぶどうしのせば　十七　嚢ぶりさけ酒のをいでそのふくろもまむるおこうんし新嚢よあらたきさけをいるまぐふくろもあぐらたるもの

べ〳〵〇十八那蘇このをんなはアブラハムのこどもなるに
拝〳〵ていひけるハおしがむもをめいまもそよ死りきたりてお
もて手をつけたまふそ生べ〳〵十九耶蘇たちてうしろよりさきの
ひその門徒〳〵とまりよゆ〳〵二十二年血漏をわづらひたる婦を
うしろよりきたりてその衣のふさにさわれり二一こ
ゝろのうちにおもひけるはたゞこの衣にさわりまつらんのみ
をもまたすくはれんとをもひたればなり二二耶蘇ふりか
へり婦をみていひけるハむすめよ心やすくせよ」なんぢの信
仰なんぢをすくへりといやせり。をんなこのときより愈二三い
ほを宰のいへにいたりふえふくものおよびおほくの人のさわ
ぎさまよふをみて二四いひけるハ退むこわいちぬる

よあゝぞたゞいねむるのみ」とびとゞ耶蘇をあざわらふ二五
このをんなをいだせしのちその手をとりしかば女おきたり
二六このきこえ遍あまねくその地にひろがりぬ二七耶蘇そこ
をさるときふたりの瞽者あきめくひてよびいひけるハダビデ
の子よわれをあはれみたまへ二八耶蘇いりきたりしかば瞽
ひきたりけるに耶蘇いひたまひけるハこのこ
とをなしうると信ずるやゞこたふ主よさうり二九耶蘇
このまなこの上に手をつけてるんぢらの信ずるごとくなんぢ
におほるべしといひけるにその目ひらけたり耶蘇きびし
くいましめてこのことをひとに知しむるなかれといひけるに

るゐれ三それどもこうもろいでくあまねくその地よ耶蘇の名をひろめたり〇三三めしひのいづるときひろく鬼よりつうもとゝる喑啞を耶蘇よつもときくゝりしよ三四鬼おひいだされたるものいくゝり。衆人あやしみ巡さりき三五パリサイのひとらもまいまだこうるこゝふくいひけるハ。この色鬼のこゝらまよりてあるとおひいだせるるり〇三五耶蘇あまねくむらきとしくゝ教へ天國の福音をのべつたへ民のうちるるもろべての病をべてのそらひをりやせり三六衆人うへものるるき羊のごとくるやみまゝ流離よるりーゆるこゝを見てあ

もろもろのたまゝ三七そのときでーたちよりいひけるハ。收穫ハおほく工人ハそくるゆゑ三八ゆるその穫主よもろくゝりいをそゝ物くらんこゝをねがへべし

第十章

さて耶蘇その十二でーをよびうれゝけがを色しくる鬼をおひいだしまゝをべてのやまひをべてのそづくりを

いやせ權をたまゝを二それ十二使徒の名ハさのごとくゝ首まハペテロとゝるづけたまひしーシモンその兄弟アンデ

ゼベダイの子ヤコブそのきやうだいヨハネ三ピルポバルトロマイ

トーマ稅吏マタイアルパイの子ヤコブタッダイとゝづく

る四カナンのシモンイスカリオテのユダこゝを

ち耶蘇をうけいれ、せ、もののみ（五）耶蘇この十二をつかはし
んじて命じていひけるは、異邦の途にゆくなかれ、サマリヤ
人のもろもろの邑にいるなかれ、六たゞイスラエルの家の
羊にゆけ、七ゆきて天國ちかづきたりとのべつたへよ、病
のものをいやし、癩病きよめ、死たるものをよみがへらせ
鬼をおひいだせ、こゝろをせよ、ただで受たるものなれば
ただにてあたへよ、九なんぢら金または銀または
銭をたづさへゆくなかれ、十たびぶくろ二のしたぎ
履つゑもまたこれをもつなかれ、そは働人の食物をうる
は宜なり、十一何ほどよき郷邑にいるとも、そのうちの好人をた

づねていづるまでそこにとゞまり、去ときにいたれ、十二人のいへ
その平安をとく、十三その家これにふさはしくば、平安はそのいへ
なんぢらのねがふ平安はそのいへ
を受べし、されどふさはしからずば、なんぢらの祈ふやきかへ
ぢらにかへるべし、十四なんぢらを接ずなんぢらの言をも
きくのざるものあらばその家またはその邑をさるとき、足の
ちりをはらへ、十五まことになんぢらにつげん、審判の日に
ソドムとゴモラの地はこのむらよりもゆるやかなるべし
らん、（十六）それなんぢらをつかはすは羊を狼のなかにいる
るがごとくするなり、ゆゑに蛇のごとくさとく鴿のごとくおとなし

この色をつくりみて人はこころせよ。そは人あんちうと集議所よわれをつかまつりその會堂うのてむちうつべければなり。十八また
よわれの緣故よりて侯伯および王のまへよひうるべし。これ
もて己のこと異邦人に證をなさんがためなり。十九人あんちう
を解さばいかなるよといふともおよひうらうあうを。そ
のときいかべきことあんちうの賜るべし。二十こもあんち
らみづからいふにあらず父の靈そのうちもおあ
りていふなり。二十一兄弟はきやうだいを死よわたすに父は子を
わたし子は父におやを誰こうこもとをらうさしむべし。二十二ま
たふんちうわれの名のためはきべてその人はにくまれん。されど終まで忍ものはすくはれん。二十三この邑にて人あん
ちうを迫害せめあらばほかのものがれよ。まことにわれ
ちうにつげん。あんちうイスラエルのむらうをめぐりつくさ
ざるうちは人の子はきたるべし。二十四師よりまさるでしはその師の
ごとくまさるべい主よりまさるざるあり。二十五でしはその師の
ごとくなればたれば足ぬべし。僕はその主のごとくなれば
よろこべてベルゼブルといをぐまして家のものをや。二十六この
ゆゑにこの色らをおそるることなかれ。そは掩藏をされあらはさ
れざるものなくかくまれて知られざるものなけもあり。二十七
われ暗中よおいてあんちうにつげることを明處なのべよ。

耳をつけてきゝこゝろを屋上にいひあらはすよ三身とゝもに
して靈魂をこゝろもこゝにあらざるものをおそるゝなかれ
唯なんぢらたましひとこゝろを地獄にほろぼしうるものをおそれよ 二九 二羽の
すゞめは一錢にうるにあらずや
そのうちなんぢらの父のゆるしなくばそのいちもを地に
おつることあらじ 三〇 ゆゑなおそるゝなかれなんぢらの雀よ
りもまさりたり 三一 されば人のまへにわれを表はすものを
いそんものをわれもまた天にいますわが父のまへにわれ
をあらはすべし 三二 人のまへにわれを表はすものを

ひ我たるよいのちをうることを得ざ(四甲)るん
ばくを接るものいまをとうくるあり。まく我をうくるもの
いまをつてそのよげんしやものをうくるあり(四)預言者みるをも
てそのよげんしやを接るものをうくるものよげんしやのむくいを
け義人あるをもてそのたぐいきひとの報賞をうく(四)わくの門徒るをもてそのちひさき
ひとりのものにひやくこのある水一杯をまのまするものの
ハ誠にあんぢらにつげん。このるんぢその むくいを失(四)
第十一章 耶穌その十二でし示をさり道
をなをくひろめんがたのちこの諸邑にゆけ(一)さ

てヨハネ獄にありてキリストのるせしことをきゝその(二)三人
をこのもとにつかはしていひけるハ來るべきものいるんぢ
らわれのまつべきほかの他にまつべきかと(三)耶穌こたへていひ
けるハあんぢらが聞ところみるところのことをヨハネにゆきてつげよ(五)聾者ハきゝ
よのなり聾者ハきゝ死たるものハよみがへり窮者ハあまねく窮病ハきよ
いんをきのせるハあほよそむくがたきものハつまづかざるも
のハ福なり(六)この時ヨハネのらゝをひらくにいひけるハあんぢらいでゝ何をこんとて野にいでゝ
や風にうごかさるゝ葦なるんぢ葦なるんぢいでゝなにをみ

んとていでゝや美服をきたる人あるゐやもろ〳〵きこゝろもをきたるものハ王宮よりあり九さら〳〵ばるをみんとていでゝや預言者あるとの然ゐ汝らにつげんこゝをハよりんゝやよりもまさりきたるものあり十そをゐんちよさきだちて道をそなふるわが使者をゐをるんむのまへにおくらんと録されたるハこをゐり十一まことにあんちらに是をつげん婦のうみたるものゝうちいまだバプテスマのヨハネより大なるものをおこらざりきされど天國のいと小ちひさきものもこれよりハおほいなるあり十二バプテスマのヨハネのときまでより今にいたるまで人々ちからをもて天國をとらんとをそぢたるものハこれをとりて律法のよげんしたるハヨハネのときまでをゐるをもてゐり十三そをもをべての預言者と律法のよげんしたるハヨハネのときまでをゐるをもてゐり十四もしこれを承るにこゝろをこのまをきたるべきエリアハこゝをもゐり十五耳あるものハきゝてきゝゆるものハきゝてよ

十六さてこの世をなにゝたとへんや。童子ちまさよさ〳〵その侶をよびてつぶやきて笛ふけどもをどらんちゝ胸うたねどといふよに似たり十七そハヨハネきたりて食こと飲こゝをせざをゐび鬼につきたるものありと人いふくり十八人の子きたりて食をたべ酒をこのむ人こゝをつぎとり罪あるもの

友ありといふ。さて主ゴも智慧いち名の子よ義とせらるるか
り〇十そのとき耶蘇おほくの異能をおこなひたまひたる諸邑
のうれあしたあざるよりて責いひけるハ 三 あゝまきそ
ひおるこうなコラジンよおゝ禍あるうなベツサイダよおゝんぢら
のうちよあせし異能をもしツロとシドンよるせしるべ
このをゝハやゝ麻き灰をうもりてうんあゝたあしるる
べし 三 まきをんぢらよつげん審判の日よハツロとシドン
の刑罰ハおんぢらよりもおほやをうん 三 まてよ天よまで
であげられしカペナウムよまで陰府よおとさるべしそハおも
んぢらよ行しこうるまぎをもしソドマよあせしるべ

今日まてきおほたもちしおんぢらよつげん 三 まをおんぢらよりもおほやをこのうるべ
審判の日よソドマの地ハおんぢらよりひけるハ 天地の主おる父よ
〇 三 そのとき耶蘇こうていひけるハ 智者さときものよこのこうを
まよと謝せ 三 ちよ然をまこのこうのごときハ聖旨よこうおく
るあり 三 父ハうもて萬物をあたまくりたちのほうよ
子をうるものあしまた子おのびよのあうたうろめを
のほうよ父をうるものおしまた父をうるものおしまた子のあうたうろめを
重をおくるものハうもてきたれまをおんぢうとやまませ
ん 三 まをまこうろ柔和まして謙遜りのあるをびわがうびき

を負てわきまはるべくわれ平安をうべし 三 そ
のわが軛やさしくわが荷かろければなり
第十一章 そのころ耶蘇あんそく日に麥田をとほりぬ
でしたち飢て穗をつみそめたり 二 パリサイの人これを
て耶蘇にいひけるはあんそく日にはまづきこ
とをなすべからずとあなたのでしたちは 三 ダビデおよび從
ものの饑しときなしたることを讀まざるや 四 かれ
ち神の殿にいりて祭司のほかは食ふべからざるあの
ものをくらひまた從ものにあたへしパンの餅をくらひ 五 また
くるも安息日に祭司は殿のうちにて安息日を犯すも
きことを律法にもいてよまざるのかわれなんぢらにつげ
ん殿よりおほいなるものここにあり 七 われ矜恤をこのみ
て祭祀をこのまずといふの意をしらばつみなきものをつみ
きものとせざるべし 八 それ人の子はあんそく日の
主たるなり 九 こをさりてその會堂にいりしに
一手なえたる人ありければこれを 十 耶蘇にうたへ
こととそひけるは安息日にいやすことをるをゆるすや
のためなりひとりの羊をもて
るもののおちんとするにもし坑におちいら
ばこれをとりあげさるや 十二 人はひとりよりもそ

いくのもとよりそや、さもぞ安息日に善をなすよりは
その人よ。あんちの手をのべよといひければ
もちほすの手のごとく愈固パリサイのひとびと耶蘇を
こころさんとさぐるをしりてこれをさりしが
おほくの人々これをしたひ来たりければ
いやし玉ふを人よあらさきをこと戒たまひこと
預言者イザヤのいひしごとくに大にわがえらみし
僕もまたわが心よろこぶわが愛ものわれこれに
その靈をあらん。また異邦人よこれをしらせ
競ことなく喧ことなく人もその
ごとくせよあいてそのこゑを
きく

ことなく 十二 眞道をもて勝をうるにいたるまでかれは
をることなくくじけぬまた地の上に眞道をこころみ
その名をよるべしとあるごとくなりき 二十一 異邦人もまた
も鬼よりつの色たるめくらの瘡あるものを耶蘇のもとにつ
きたりければこの輩のおほくをいやしてものひうある
やうよおせり 二十二 狼人こゑおあげてひけるにダビデ
の子よいあはれみたまへ二十四 パリサイの人きてひけるにこの
人いかものこうらベルゼブルをつかひいだすにてあらざるをバ鬼をお
ひいだすことあたはずと 二十五 耶蘇そのこころをしりていひけるは
ひけうらべてあひあらそふ國のほろびさるべてあひあら

そこに邑や家いたらばこれを去サタンもサタンをおひいださらばみづからあひあらそひその國いたたんやもはや立ちもえざるべし二六サタンもはや立ちもえざるべしバあんちきりの子弟いたるまでよりて惡鬼とあひいでさらあんちきりの裁判人となるべしバ神の國にはめやあんちきりよりておのれをおひいだせしバ神の國にはめやあんちきりよいでまり二七まづ勇士をまづ縛りてのちにその家よりその物をうばひとらんや縛てのちにその家をうばひとらんべし二八まことに神の靈よりてあるものはすべてゆるさるべし二九されど聖靈にそむくものは今世にもおいてもまた來世においてもゆるされずひとびとの聖靈をけがすことはゆるさるべし三〇言をもて人の子にそむくものはゆるさるべしされどすべて聖靈にそむくものは今世にもおいてもまた來世においてもゆるされずと三一あるひと樹をもよしとせよその果をもよしとせよあるひと樹をもあしくせよその果をもあしくせよそは樹はその果によりてしるべきなり三二あゝ蝮のすゑよなんぢら惡きものにていかでよく善をいふことをえんや心にみちあふるるより口はものいふなり三三よき人はよきものをその善庫よ

きものをしりぞけ惡人はその惡きをいくぶ
せり。三六 ゝ主あんぢゝまつげんをそゞて人ののみところの虚
言をさだきの日よろこをうたくぐろを得じ。三七 そも主あんぢ
そのりゝこゝろのうちをよりて義とせゝまぢゝそのい
ふことそゞよりて罪ありとせゝるをり① 三八 このきお
る學者もパリサイのひとらくていひけるい師よ奇蹟とる
ゝてこをもとめんぢよ讖三九 こゝにてこの主こ
のひけるい好惡る世はをもむ。それぞ預言者
ヨナのをゝ一のほかにこをあたくらるまじ。四〇 それ
ヨナが三日三夜うをのそゝのうちにありしごくひの子

もみつゝこゝ地のうちにあるべし 四一 ニネベの人さばきの
日よゝもまたちて今の世のつゝをさばんこをてヨナ
のをゝくよりて悔改たり。それヨナよりあほいあるものの
こゝあり 四二 南の女王さばきの日よゝまたちていまの
世のつゝをさばんこの女王地の極よりソロモンの智慧をきゝ、
うんゝてきて主り。そ主ソロモンよりあほいあるものこゝよ
あり 四三 あくき人よりいでゝこのうきたるこゝろをめぐり安
息をもとめもとめどもえざるとき 四四 わがいでゝ家よ
うくらんとそでゝきゝりしよまゐうぐ
主るをとゝ 四五 遂よのきそ初の惡鬼を

たゞさま〴〵よりて居べその人のかたちのありさまよりもあほおろぐべし。このおしき世もまたこのごとくあらん　四六　耶蘇ひらきてそこらをるときその母と兄弟こと〴〵よめいきんとそこにたちけるに　四七　あるひと耶蘇にいひけるはあんじの母ときやうだいあんじよのいきんらそこにたてりいひけるはわが母わがたちきぞや　四八　耶蘇つげしものにこたへていべその門徒をさしていひけるは。これわがはゝわがきやうだいたぐいあり　五十　そはまことにわが天にいまる父の旨をおこなふものはこれわが兄弟わが姉妹わが母あるきをあり

第十三章

この日耶蘇いへをいでゝうみぐちに坐せり　二　おほくの人をつどへあつまりきたりければ舟にのりてすべての人々はきしにたてり　三　耶蘇たくさんのことをひとぐちにこうぐりぬ種まくものまきやういでゝ播るときみちのほとりにおちたねありてそらの鳥きたりてこれをつくせり　五　また土うすきに磽地におちたねありたゞちにもえでたるもてりいでゝ日のいでゝきやうきをえず　六　また根あきらぬゆゑにこの迹たりて枯ぬ　七　また棘中におちたねありて棘ともにおひたちてこれをふさげぬ　八　また沃壌におちたねありて實をむすべるにあるひは百倍あるひは六十倍あるひは三十倍あるものありてきゝゐよ

ひゃく三十倍せり 九 耳あり
徒たるものきゝてこのせよいひけるゝあるゆゑに譬をもてこの
をしへをとくやうにしていひけるハ汝たちハ
八 天國の奥義をさとることをあたへられてをほ
くたるものにハ予られてなほ
まうあり無有ものハそのもつところのものをも
一 十二 このをしへをハ視てもみざるべく聽てもきゝざるがゆゑ
にたとへをもてこうをとく 古 イザヤの預言よ。
あんぢらハきゝもきゝみをもてもみをそこの民め
て見みてきゝてこゝろ

そもんこゝろとおそをもてその心とにぶく耳とおほひ目をとぢたるをといひこのゆゑ 十六 されどもあんぢらの目ハこゝろ
あんぢらのつげんあほくの預言者と義人ハあんぢらがみ
るところをそんとしたりしが見ることをえざりき
くところをきゝんとしたりしが聞ことをえざりき 大ゆゑ
にあんぢら播種のたとへをきけ 九 天國のをしへをときて
さまたぐるものおほきものきたりてその心にまかれたる
ねをとりさることをしゆゑ路のほとりにまかれたるたねハ 十 磽地に
まかれたるたねハこのことをきゝてよろこびをみやうに

びうくをでゝも 三 おのをでよ 根 をぎーのえだを
めよ 患難 あるひは せめくるて ことのおこるときは たちま
ち 道 よつまづく ものあり 三 まさいだるの あるよ まうきた
る 種 いこををくへときけど もこの世のこゝろづかひと
貨財 のまどひよをくへ 妨 ときてさまり 實
をむをぶことあるひは 百倍 あるひは六十倍あるひは三十
倍 をるものあり 〇 二四 まさたくとこるをあしていひ
けるは 大國 へ人はるけよ 王 にくり 二五
ひとくのつもたるその 敵 きたり 麥 のあるこゝをそ

むぎをまきそさるをり 二六 苗 たゝ 廻 りて みのりたるときこゝろ
もむぎもあらはをたり 二七 あるじの僕 きたりていひけるは
主 よたねをけるは 美種 をまきたるのにあらずや いづこより
ぎあるや 二八 ちもぐよいひけるは 敵人 こをるせりと 僕
主 よいひけるは きてこをぬきあつむ
るよまさる 二九 否 あそくいはんぬきあつむるとき
めんとそ 麥 をもともぬくべし 三〇 收穫 まであらるがく
そざそあけ。をこりいをのときに 先 こゝをむぎをぬきあつ
めそやうん たきよこををつくね。麥 をびやがらこををさめ
よくいれん 〇 三一 またたくへ

天國ハ一人ヲ取テ其ヲ己ガ園ニ蒔タル芥菜ノ種ノ如シ 三二 芥菜ノ種ハ諸ノ種ヨリ小キモノナレドモ長ジテハ諸ノ菜ヨリ大キクナリテ天ノ鳥來リテ其ノ枝ニ棲ムニ至ルナリ ○三三 又イエス譬ヲ以テ彼等ニ語リ給ヒケルハ天國ハ酵ヲ取テ三斗ノ粉ニ藏ヘタル婦人ノ如シ全ク膨ルニ至ルナリ ○三四 イエス此ノ凡テノ事ヲ譬ヲ以テ群衆ニ語リ給ヒ譬ヲ用ヒズシテハ何事モ彼等ニ語リ給ハザリキ 三五 是預言者ニヨリテ言ヒシ事ノ應ンガ爲ナリ曰ク我口ヲ開キテ譬ヲ設ケ世ノ創ノ時ヨリ隱レタル事ドモヲ發ベシト ○三六 爰ニイエス群衆ヲ去ラシメテ室ニ入リ給ヒシニ弟子等來リテ曰ク園ノ中ノ毒麥ノ譬ヲ我等ニ解キ給ヘト 三七 イエス答ヘテ曰ヒケルハ善キ種ヲ播ク者ハ人ノ子ナリ 三八 畑ハ此ノ世界ナリ善キ種ハ天國ノ子ナリ毒麥ハ惡魔ノ子ナリ 三九 之ヲ播ケル仇ハ惡魔ナリ收穫ハ此ノ世ノ終ナリ收ル者ハ天使ナリ 四〇 故ニ毒麥ヲ集メテ火ニ燒ク如ク此ノ世ノ終ニモ斯ノ如クナルベシ 四一 人ノ子ハ其ノ使者ヲ遣ハシ其ノ國ノ中ヨリ凡テ躓ク者ト惡ヲ行フ者トヲ集メ 四二 之ヲ燃ル火ノ爐ニ投入ルベシ彼處ニテ哭キ齒ヲ切ルナリ 四三 其時義人ハ其ノ父ノ國ニテ日ノ如ク輝カン耳ノ有ル者ハ聽ケ

四二 こゝを爐の火にまげいるべし。そこにて齒を
るゝことあらん 四三 このとき義人はその父の國にお
のごとくにかゞやかん。耳ある者はきくべし。
四四 また天國はたくはへおける寶のごとし。人みいだ
ばこゝを秘よろこびてその所有をことごとくうりてその
の田をこうなり。○ 四五 また天國はよき珍珠をもとめん
るおきびとのごとし。 四六 一のあたひたかき珍珠をみいだ
さばそのもちものをことごとくうりてこれを買なり。○ 四七 また
さてんくは海にうちなげて、さまざまの魚をとる。網のごとし。 四八
そでよろこびきよひきあげ坐てそのよきものをうつを

よい色ものをさるなり 四九 世のをはりもかくのごとくなるべし。
うくのごとくなるべん。天のつかひたちいでゝ 五〇 義者のうちより
りあしきものをとりわけ 五一 爐の火になげいるべし。
そこにて哀哭さがみをることあらん。○ 五二 耶蘇このことをことごとく悟しやと
ひけるに、こたへていひけるは、主よ。
もちのり 五三 耶蘇このたとへをいひけるは、さればてんくにつかい
てをしへらるゝ學者はあらゆるきものとふるきものとを
をその庫よりいだす家のあるじのごとし。○ 五四 耶蘇このたと
よくをいひをはりてこゝをさりぬ 五五 そのふるさとにいたり
り會堂にてをしへをなしければ、かの人

の智慧と異能ハいづこよりきたるや 五五 これ木匠の子にあ
らずやその母ハマリアその兄弟ハヤコブヨセシモン
ユダにあらずや 五六 その妹たちハみなわれらとともにある
にあらずやさればこの人のすべてこれらのことハいづ
こよりきたりしや 五七 つひに厭てこれをそしる耶蘇これに
いひけるハよげんじやをその故土そのいへのほかにお
てたつとまざることなし 五八 このひとゞが信ぜざることおほきに
よりておほくのふしぎなるわざをこゝにてなしたまハざり
き

第十四章 そのころ分封のきミヘロデ耶蘇のうハさをきゝて

二 そのしもべにいひけるハこれバプテスマのヨハネなり。この
ものよみがへりたり。ゆゑにふしぎなるわざをおこなふなり
三 前にヘロデそのきやうだいピリツポの妻ヘロデヤのことに
よりてヨハネをとらへしばりて獄につなぎたり 四 これハ
ヨハネヘロデにこのものをめとるハよろしからずとい
ひしによる 五 これヨハネをころさんとおもへど民これを
預言者とおもふによりてこれをおそれたりしが 六 ヘロデ誕
生の日をいはふときヘロデヤのむすめその坐上にて舞
をなしヘロデをよろこばせければ 七 いかなるものにても求
にまかせておくらんとヘロデこれにちかひたり 八 むすめハ

その母のそばにおりしがバプテスマのヨハネの首を盤よ
のせてこれをまたまえにいしが 九王うれひけるにぞよ
誓たるに席よりおきるものたちあるこことを命
じ十ものをるそち人をつうちて獄よもいてヨハネのくびをき
らせ十一その首をぼんよのせてむすめよあたへければ女
がこれをその母のまえよさしげたり 十二ヨハネのでしたちきた
りて屍をとりこれをほうむりてきたりて耶蘇まうづ 十三耶蘇こ
れをきいて人をさけ船よのりてそこをさりさびしきところ
よゆきたまひしが衆人きいて歩行よりてこれよしたがふ
り〇十四耶蘇いでまふ

病るものをいやせり 十五日くれかかりてゐ
ひけるいでこの人ぐ寂寞ところにて時もまやをそ
へゆきてみづから食をもとめよ 十六耶蘇
いふよ去ゆくことをよいひけるに人々ゆうぜんなくよ
んじることをよ食とあたへよ 十七こたへていふよはここ
たゞ五の餅とふたつの魚あるのみ 十八耶蘇のひけるにそを
とりよりちきたれよ 十九遂よひとぐよ命じて草よすわらしめ五
のパンと二のうを取とり天をあふぎて謝しパンをさきて
でしよあたへよ門徒これをひとぐよあたへぬ 二十皆くらひて
飽そのあまりたるくずをひろひあつめよ十二の筐よみちたり

二一 くらひしものハ婦人こどものほかおほよそ五千人なり
き〇 二二 やがて耶穌ひとびとをかへさんとしてその門徒をし
ひて舟にのせむかふのきしへさきだちわたらしむ 二三 かくて
ひとびとをかへしけれバ祈禱せんとてひそかに山にのぼり
日くれてひとりそこにいませり 二四 ふねハ海中にありて逆
風のためになみにたゞよはさる 二五 夜の四時ごろ耶穌うみ
のうへをあゆみてこれにいたりしに 二六 門徒そのうみのうへ
をあゆめるをみておどろきてこハ變化のものなりといひ
ておそれさけびたり 二七 耶穌やがてこれにつげていひけるハこ
ころやすかれわれなりおそるゝなかれ 二八 ペテロこたへてい
ひけるハ主よもしなんぢならバわれに命じみづをふみて
なんぢのもとにいたらしめよ 二九 來れといひたまひければ
ペテロふねよりおりて耶穌のもとにいたらんとて浪のうへ
をあゆみたれど 三十 風のはげしきをみておそれしづみかゝ
りけれバ主よわれをたすけたまへとよバはりければ 三一 耶穌やがて手
をのべてこれをとらへていひけるハ信仰のうすきものよな
んぞうたがふや 三二 ともに舟にのりければ風しづまりぬ 三三
ふねにありしものちかよりてこれを拜しいひけるハまことに
なんぢハ神の子なり〇 三四 つひにわたりてゲネサレの地
にいたりけれバ 三五 そのところのひとびと耶穌をしりてあま

ねく四方より人をつのそして病のものをたづさへきたらしむ三一たゞその衣のきそにでもさはらんことを耶蘇にねがひつゝ押あつまりしものいとおほかりたり

第十五章

一そのとき耶蘇エルサレムの學者とパリサイのひと耶蘇のまへに來りていひけるは二なんぢの門徒いまゝでの人のつたへを犯すはなにゆゑぞ彼らは食するときに手をあらはざれば罪ありとなすなり三こゝにて耶蘇こたへていひけるはなんぢらもまた己のつたへによりて神の誡命をおかすはなにゆゑぞ四神いひたまふなんぢの父母をうやまへまた父母をのゝしるものは必ずころさるべしとのたまへり五されどなんぢらは人もし父にまたは母にいふ

新約全書　馬太傳第十五章　自六至二十節　四十五

ものは神にさゝぐるものなれば六その父母をうやまふにおよばずといへばなんぢらは己のつたへによりて神のいましめをむなしくせり七偽善者よイザヤはなんぢらのことを預言していひしことよく當れり八この民はくちびるをもて我をあがめ
心は我をとほくはなれたり
九人のいましめを教として
教ふるゆゑにみだりに我をしたふなり十耶蘇ひとの群衆をよびよせていひけるはきゝてさとれ十一口にいるものは人をけがすことなくして口より出るものは人をけがすものなり十二門徒きたりて耶蘇にいひけるはパリサイの人

このことばをきゝていとひ棄るをなんぢしれるの 十三 こたへて
いひけるはわが天の父のうゑざるものはことごとくぬかるべ
し 十四 このひとをすておけ瞽者のてびきするめしひなりもし
めしひのもの瞽者のてびきせばふたりとも溝におつべし 十五
ペテロ耶蘇にこたへていひけるはこのたとへをわれらにと
きたまへ 十六 耶蘇いひけるはなんぢらもいまださとらざる
か 十七 すべて口にいるものは腹をとほりてかはやにおつる
をいまださとらざるや 十八 口よりいづるものはこゝろより出
これ人をけがすものなり 十九 それこゝろよりいづるところ
の悪念 凶殺 姦淫 苟合 盜竊 妄證 謗讟 二十 これらは人をけがすもの

ものなりされども手をあらはずしてくらふは人をけがさ
ず 二十一 耶蘇こゝをさりてツロとシドンの地にゆきけるに 二十二 そ
の地にをるカナンの婦いでゝよばゝりていひけるは主よ
ダビデの子よわれをあはれみたまへわがむすめ鬼につ
かれていたくくるしめり 二十三 耶蘇ひとことばもこたへ
ざりしかばその門徒きたりこふていひけるはをんなはわれらのあ
とより喊叫がゆゑにこれをさらせたまへ 二十四 こたへていひ
けるはイスラエルの家のまよへる羊のほかにはつかはさ
れず 二十五 婦きたり拜していひけるは主よわれをたすけた
まへ 二十六 こたへけるは兒女のパンをとりて犬になげあたふ

るいよろーこうぞ 三七 とんるいぬもその主人の膳よりおつる 二六 つひる耶蘇こころくいひけるを
あり ねがひのごとくあんじ成べーこのときよりその女
い出たり○ 元 耶蘇らーをさりガリラヤのくにぐにまめき山
るのほりて坐せり 三〇 あるくのひとびと跛者めーひ瘠者うる
はおよびさまざまのやまひあるものをともまひきたり 耶蘇
のあーもとにおきけるをもちこころをいやーね 三一 らて
よおいておーいものいひ殘疾いい出ぱあーまくいおゆる
瞽者いでい出たるをひとびと見ておやーをイスラエルの神をあ

がめたり○ 三一 耶蘇そのでーしを召ていひけるは此衆
人をおころをむ。のもとこころをるこころをるこころを
らよものあーしかさせてきこくしもむることをこのおよそう
くい途間よそたまん 三二 そのでーこのをよいひけるは野
てこのおほくの人よあくのをるほどの餅をいだしえん
や 三三 耶蘇こうをこいひけるはパンいくつのあるやこくけ
るは七とをこの魚あり 三五 耶蘇ひとびと命じて地よをて
らしめ 三六 七のパンとうをいて謝ーこをとりてその門で
徒はあしーでーこをひとびとはあて 三七 らんてこ
な飽たり。あまりの屑をひろひあつめて七のうごよみてり

こゝを食るものをんなあり
三九 耶蘇ひそ〳〵をさゝやき
いふことを

第十六章 パリサイとサドガイの人こゝろみて耶蘇をこゝろんとして天のしるしをこゝにせよといひけるに 二 ゆふべ
こゝにけるにあんむら暮るハやよやけまさくなりよりて晴るる
んといひ 三 朝にはあるやけまさくなりよりて雨
あらんといふ。偽善者よそらのけしきをわくることを
て時のしるしをわくることあたはざるや 四 姦悪ある世ハしる
しをもとむるもよげんしるしはヨナの休徴のほかあるまじ
と

あるにこゝにてつひにこれをさりぬ 〇 五 そのでし
しむらの岸にいたりしときパンをたづさふることをわすれ
たり 六 耶蘇これにいひけるハこゝろしてパリサイ
サドガイの人のパンだねをつゝしめよ 七 門徒たがひに論
していひけるハこれパンをたづさへざりしがゆゑならんと 八
耶蘇これをしりていひけるハ信仰うすきものよなんぞた
がひに餅をたづさへざることをろんずるや 九 いまだ
さとらざるや五千人にさきしパンをおもひいでざるのか
ごひろひやまた四千人にさきしパンをおもひいでざるか
きいくごひろひやまんぢうこれをおぼえざるか 十

パリサイとサドガイの人のパンだねをつゝしめよくれ餅ゟつゝきていくるよあゝさるをあんそさゝざる 十二こゝよおいて門徒そのパンなねよハあゝでパリサイとサドガイのひとのをつゝしめよくれ餅ゟつゝきていくるよあゝさるをあんそさゝざる 十二こゝよおいて門徒そのパンなねよハあゝでパリサイとサドガイのひとのをつゝしめよといつるあるをさゝもり ○十三耶蘇ピリッポのカイザリヤのうゝよいたるとき門徒にとひていはく人の子をたれといふやと 十四かれらいひけるハひとゝ人の子をたれといふやと 十四かれらいひけるハある人ハバプテスマのヨハネあるひハエリヤあるひハエレミヤまゝ預言者のひとりありといふを 十五いひるゝけるゝあんちゝハまゝをいひて誰とまゝるの 十六シモンペテロこゝよいひこゝけるゝあんちゝハキリスト活神の子あり 十七耶蘇こゝ

てゝよまゝよいひけるハヨナの子シモンあんちゝさんたひみりでゝ血肉あんちよまゝあらせるよおゝ父ありよ 十八我まゝあんぢよつげんあんぢハペテロありわれ教會をこのゝのうゝつぐうゝぜえまゝうゝまゝてんぢ陰府の門ハてゝまゝよおあんぢよちよおいて繋うゝまゝ天よおゝ地よおゝて繋うゝまゝ天よおひてもつゝまゝきるあんぢよ 十九我まゝ天の國の鍵をあんでよあゝその門徒をいまゝよおいてもそゝべゝきつひよこゝおうまゝ ○二十このゝきまゝよおいてキリストと人よつゝらるゝことをゆるすより耶蘇そのでゝよおのゝまのゝをゝ學者たちよりおほゝ

エルサレムよゆきて長老さゝ

のろ〳〵をうけうろ〳〵第三日よよ〳〵ぶくるとを示まじむ 三ペテロ耶蘇をひきとめて主よとうぞくのとあんちよきこるまじといひけまべ 三耶蘇ふりむくりてペテロよいひけるサタンよわがうしろまりぞけあんぢハわまよ礙ものあり。そもそもあんだい神のことをおもべよくうて人のことをおもべ 四このとき耶蘇そのでしよいひけるもしまんとおものはおのをきてそのの十字架を負てまとまく 三五そのいのちを保全せんとまるものハこれをうしなひわのためよその生命をうしなふものハこれをうべけまべあり 三六

人せうひちりとうるとそのいのちをうしなふまんの益あらんやまた人よそのをもてその生命よまんや 三七人の子ハその榮光をもてそのつのひたもとともに行てきたりそのの行ようてむくゆべし 三八まことなんぢらよつげん人の子その國をもてきたるをうるまでハらゝよ立ものうちよまもざるものあるべし

第十七章

六日のち耶蘇ペテロヤコブその兄弟ヨハネをともなひ人をさけてくうき山嶺よのぼりたまひしに 二ふしぎのまへにてそのをおたまひりそのよ日のごとくやきその衣いろ〳〵ひかりまりモーセとエリヤまらはれて

耶蘇(いえす)と そのまよひぬ 四ベテロ こゝにて耶蘇(いえす)にいひけるは
ハ主(しゅ)よ 善(よ)きことらこゝに ありまつるは善(よ)きことなり 汝(なんぢ)
もし こゝに三(さん)の廬(いほり)を つくらせたまへ 一(ひと)つは主(しゅ)のため 一(ひと)つは
のため 一(ひと)つはエリアのためなり 五(いつ)よせん よくいひくるゝまに
ける雲(くも)のわれらを おほふ 聲(こえ)くだりて 曰(いは)く ひけるかこれ
わが愛子(あいし)あり 汝(なんぢ)ら これに 六門徒(でし)ら 聽(きゝ)てをれ
耶蘇(いえす)きたりて 手(て)を 觸(ふれ)て 起(おこ)よおそるゝ まかの目(め)を
ひけるとき ハその目(め)を あけて 耶蘇(いえす)のほかに ひとりをも
くだりき 〇 九山(やま)を くだるとき 耶蘇(いえす) 命(めい)して 人(ひと)の

子(こ)のよみがへるまでは あんぢら 見(み)こと
うつすべからず 十 その弟子(でし)ら 學者(がくしや)の
かさきよきことぞ 學者(がくしや)のいふは エリア
へていひけるは 實(まこと)は エリア いきたりて 萬事(よろづのこと)を あらたむべ
しと 十一 さとしたまふ 耶蘇(いえす) こゝに
しと 十二 さとしたまふ エリアは きたりて
しは人(ひと)こゝを きらびたれど 任意(こゝろのまゝ)に
ごとく人(ひと)の子(こ)も かくのごとく
こゝろ 悟(さと)りて 門徒(でし)バプテスマの ヨハネを
をさとしたまふ 〇 十四 その群衆(むれ)の ところに きたりし
しに あるひと 耶蘇(いえす)の もとに きたり 曲跟(ひざまづ) 十五 いひけるは 主(しゅ)よ

わが子とあるをたまく癩こそ火にたゝを水に
たのをたるかたくるるりり十六こをるんちの門徒につを
ゆきたくきていやそこゝを得ざりき耶蘇こゝていひけ
るはあゝ信あきまがまる世まるうまでまりまでるんち
らとそもまをんやをいつまでんちを忍んやう並
をわがもゝつきゝをゝ大つは耶蘇おこをいまめた
まくぶ鬼いでその子このときよをいたり元そのとき
でーひそうは耶蘇よきりこををひ
いをことあをざりしいひけるんちまくるんち信あきまがの色そ三耶蘇このまゝまい
ひけるんちまくるんち信あきまがの色ありまをまゝこまるんち

らつげんこゝ米種のごとき信あくぶこの山こゝりう
こるうをとりもこのまゝぞうらんまくるんち
らまあをざることあうぶべーニ三さまどこのたぐひハ祈
禱と斷食によあざれをいづることあーニ〇三カリラヤを周
流とき耶蘇うまをうまいひけるい人の子ひとの手につさ
をニ三こうころさをて第三日によみがへるべーと門徒こをとき
きてまをたまぐう〇三この色てカペナウンにきたるとき
ち稅金とあつむるものどもペテロにきたりていひける
ハをんちの師いををめきんをいざるこう三五ちうこ
といひてペテロいよいまゝ耶蘇まづこをいひける

そこにシモンあんぢいふこうまをよび人税をたてまつりたるものの子よりうほうのものの
ようこの二六ペテロこのをよびけるにさきばこうまをとりてそのくちをひらくば金ひ
耶蘇このをよびけるにさきばこうまをとりてそのくちをひらくば金ひ
れどりをつまづかせざるためうみにゆきて釣
をたれよさきにあがりつる魚をとりてそのくちをひらくば金ひ
とつをとりてわれとなんぢのためにこのをと
納よ

第十八章

一そのときでし耶蘇にきたりていひけるは天國にお
いて大なるものはたれぞやと二耶蘇
のあつまりたるなかにをさなごをよびてこれをかれらのまへにたてて三いひけるはまことになんぢらに告ん
なんぢあらたまりて孩提のごとくならばてんこくにいるこ
とをえじ四されば自ほをさなごのごとくみづから
くだるものはこれ天國において大なるものなり五またわが名のためにかかるひとりのをさなご
をうけいるるものはわれをうけいるるなり六されどわれをしんずるこの
小子のひとりとつまづくをさするものは磨石をその頸にかけられて海のふかきところにしづめられんこと
さこの世はわざはひあるかな。そはつまづくことをさするこ
とをさるをえず礙こそいふあるはぞきをき

たゝんものゝ禍あるやう八ゝーあんぢの手あんぢの足ものをつまづくさゝばきりてこゝをすてよ兩手兩足ありてつきざる火にあげいれんよりハ跛またハかたわにて生命にいるハよきあり九
さゞぬきいだしてこゝをすてよ兩眼ありてぢこくの火にあげいれんよりハ一眼ありていのちにいるハよきあり
十 あんぢらこのちひさきものゝひとりをもつまづけんことを輕視ふるまなかれ我なんぢらにつげん天のつかひハ天にありて天にいますわが父のかほをつねにみるなり
十一 そもそも人の子ハほろびたるものをすくはんたあにきたるなり
十二 なんぢらいかゝおもふや人もし一百匹のひつじあらんにその一ぴきまよはゝ九十九と山にをきてまよへるものをたづねざるや
十三 まことにわれなんぢらにつげんそのひとつをえたるハ尋ねえざる九十九のものよりもかれをよろこぶべきなり
十四 このごとくこのちひさきものゝひとりのほろぶるハ天にいますなんぢらの父のこゝろにあるまじきなり
十五 なんぢの兄弟なんぢにつみをおかさゞばゆきてそのあやまちをなんぢとかれとのみにてあらはせ兄弟をえたるべし
十六 もしきかざるときハ兩三人の口によりてあらゆることばをたゞしかためんためなり

をとゝまねひやけよ こゝろ一つをもて
ものしげくきたいまきのぞくこゝろを異邦人こうぜ税吏のごと
きものとをくべし 六 又をもてまねてこゝろ
そあんぢ〳〵の地よおいて繋こゝろ天もおいてもとくべし 九 又
んぢ〳〵の地よおいて釋こゝろ天もおいてもつげんおほよ
をまねあんぢらのうち二人のもの
いまをわれの父いこうをもて成たまふべし 十 そ
いわれの名のたもつ二三人のあつまるところあれば
そのうちまあれどもあり〇 三 そのときペテロ。耶穌にきたり

ていひけるは 主よいくたびまでわれの兄弟のわれにつみを犯
をそうをゆるすべきのまでたびまでや 二十二 耶穌こうぜひ
けるはあんぢに七次といはず七十倍せまで 二十三
このゆゑに天國の王そのけいさんをもつ僕輩と會計をもとべんくする
ものこと 二十四 そもくべそのはじめとき千萬金のひきあひたる
ものを王にひきたりしこと 二十五 つぐのひうとうけざれば
こをもて命じてその身その妻挙とあるものをもてあるものをもて
くりてつぐのくこと 二十六 その臣ひまふしてのひはるん請
わまを寛しなまえでこうかつぐのべーモこをおいてその
のけいの主あをれをてこをもて釋そのひきあひをゆる

たり 六 その臣いでて 銀一百のひきおひしたる
友まおひけるをば こらをとらへ 喉をとりひきしめ
こりて 七 その友 あしもとに俯伏てねがひいひけるは
を覚しなまえて こるつくのふべし 八 ゆきその負債をつ
ぬ 三 ほかの友その為せることをきゝて 往
てこのことをその主につげうれ 三 主 このことをよびて
のひけるいおしき臣よ ちわるまる求しまりてわまそ
のひきおひをもとくに免たり 三 わがもんじをおされを
しこと もんじまゝ友をおされもぐきまあらやや 三 そ

の主いうりてひきおひとるまる償までこうまと獄吏よわさせ
り 三五 おのくその心より兄弟をゆるさゞればわが天父もち
ちもまこまんじこうくのごとくまちふべし

第十九章

耶穌 こまこのことをいひをりてヨルダンのむうふユダヤの境をこ
人々をこゞひこゝにてこのとろを醫なまくり 二 おほくの
三 パリサイのひときりて耶穌をこゝろみていひける人おの
なの故よ うそびその妻をいさまろ 四 こゝこゝて
このまこいひける元始より人をつくりたまひしものおこ
まを男女につくまり 五 このゆゑに人もちをまをれて

その妻よあひ二人のものだよまぎるこのゝさればそもせたまふるものゝ人こゝをひけるゝさしゝば離縁状をゝ命ぜしゝまるぞやゝいふゝらの心のつゝまきゝよりてありゞされど元始ゝこゝあらざりき九まんちつげん淫事のゆゑまゝでその妻をいぶしほうの婦をめどるものゝ姦淫をまゝとまふゝるまゝこゝされる婦をめどるまゝのまゝこんゝんを行ふあり十でしたち耶蘇ゝいひけるゝ

そ一人つまよおいてこゝのごとく緊ぶるまゝをゝ十一このまゝまいひけるゝこのことゝをゝたゞ禀賦たるものゝのまゝよりうまれつきゝたる寺人ありまゝ母寺人ありまゝ天國のたゝめみづからまる寺人ありこゝをゝうけいるゝこゝをうるものゝ納べしゝ〇十三そのゝきひとゝびと耶蘇の手をつけていのりんこゝを求をゝかこゞはゝれゝつゝきゝたりけるゝ門徒こゝをゝとゝめたり十四耶蘇いひけるゝ孩提をゆるせわゝきてこゝをいますゝもるなかゝれ天國ゝをるものゝこのごとゝきものあり十五そのまゝまそもこゝを

らつて手をつけてころをさりぬ○十六ある人きたりてこうまういひけるは善師よわをこうぎう生をえんがためいあるよのよきこうをあをべきうをまいひけるみよめろ迚をよのきとりふやひとりの善ものいおーをみたち神ありごとくいのちよりんとおもうべーし十八のれこうこうけるふ何う。耶蘇いをるあうをぬをむあう迚いうたんちの父と母とうやまへまなのをのこうこうんちの隣をおいをべーし二十少者こうまでよいうひけるこうまういとけおきてりまもまるものありぬあ二の虧たるところわをいまでおるやの針のおあをとほるいあほやまでーし二十五門徒こうまをきうべーしおどろきいひけるいかでは誰こうをひをうべきや二六耶蘇こうまてうをこうていひけるいこうを人まいあうをざる

くころありてされど神はわれらころあり一〇 二七 このきべテロこたへて耶蘇にいひけるはわれ一切をすてておんみにまをしたがひたれば我らはいかなるをえべきや 二八 耶蘇こたへていひけるはまことにまんちにつげんなんぢらわれにしたがひたるなんぢらは世あらたまりて人の子さかえの位にざするときなんぢらも十二の位にざしてイスラエルの十二の支派をさばくべし 二九 またわれの名のためにて家宅あるひは兄弟あるひは姉妹あるひは父あるひは母あるひは妻あるひは子あるひは田畴をすつるものは百倍をうけ永生をつぐべし 三〇 されど後なるものの先なるものあり後なるものの先なるものあり

第二十章

一 それ天國はあるやどいでて葡萄園にやとふ主人のごとし 二 かれ一日に銀一枚をあたへんと約束をなしてその葡萄園につかはせり 三 また九時ごろいでて市場にたつものの閑にをるをみ 四 またこれにいひけるはなんぢらもぶどう園にゆけ相當のあたひをあたへんとてゆけり 五 また十二時と三時ごろいでてまたおなじくせり 六 五時ごろいでてまたほかの立るものをみていひけるはなんぢらなにゆゑ終日ここにむなしくたちやと

まで、やとふ ものの あきなふ ようて ありぞの まで、ごとく いひける ぶんぢら も 葡萄園（ぶだうゑん）へ ゆけさうたらの 價（あたひ）を うぐ ぞ ハ日（ひ）る るごとき ぶだうゑの 家（いへ）の あるじ その 家宰（つかさ）に いひける ハ、まで らきたる ものの ごとも を よびて 後（あと）より つる ものを はじめ 一先（ひとさき）の ものの まで おほく を もつ よ 九 五時（ごじ）ごろ やとれ もの ごとき て 銀（ぎん）一枚（まい）で を うけたり 十 さきの ものの ごとき て まで いはほ うる ぶんと おもひ ます 銀（ぎん）一枚（まい）で を うく 主人（しゅじん）に こと うけて 主人（しゅじん）を うらみ ぶやきける、 主 この 後至（あとより）者（もの）の そ きたる、一時（ひとき）を り ぶる よ 終日（ひねもす）くる みを 負（おひ）ある ぞ ハ 我（われ）ら ある る まで と ひと

くこと を ある せり 主 ある じ その 一人（ひとり）に こたへて いひける ハ 友（とも）よ まで ぶんら よ 不義（ふぎ）を せ ず ぞ ぶんぢと 銀（ぎん）いちまい の やく そく を なり たる よ あら ざや 西（にし） ぶんぢの もの を とりて かへ まで、此（この）ものの ごとき ぶんぢ に ごとく あたへ べし 主 そ の もの を もて わが おもふ ごとく を なす こと を やわが ぶんぢ ハ よう しき よ 夫（それ）の ごとく 後（あと）の もの は 先（さき）の もの に あら ざる べし。そ まで よ ばれ もの は すくなし。 ○ 主 耶蘇（やそ） おほぐら に のぼる とき 途間（みち）に て 衆（しう）を とる 十二門徒（でし）を ひそ に こ の まで より ひけ る ハ 主 エルサレム に のぼり

エルサレム

エルサレム に のぼる とき 途間（みち）に て 衆（しう）を とる 十二門徒（でし）を ひそ に こ の まで より ひけ る ハ 主 エルサレム に のぼり

人の子ハ祭司の長たちと學者たちの手に
死罪に定められ十字架につけんために
異邦人に渡すべし。三日目によみがへるべし。」十九 そ
のときゼベダイの子たちの母その
子ら共にイエスの前にきたり拜
して何事をか願はんとす。二十 イエス
之に言ひけるは、
汝なにを願ふや。答へて言ふ、
我ら國を得るとき、この二人の子を
汝の右ひとりを汝の左に坐せしめたまへ。二十一 イエス
言ひけるは、
汝らは求むる所を知らず。我が飲まんとする杯
を飲み、我がバプテスマを受けるバプテスマを
受けんことを得るや。二十二 彼ら
言ひけるは、
得べし。二十三 イエス
言ひけるは、
汝らは實に我が杯を飲み、我がバプテスマを受けん。
されど我が右左に坐することは我が賜
ふべきにあらず、ただ我が父の備へおきたまへる
人にあるなり。二十四 十人
これを聞きて二人の兄弟を憤
ほどろ。二十五 耶蘇
これらを呼びて言ひけるは、
汝らの知るごとく異邦の領主は
その民を壓制し大なるものどもは
その民を權
をとるこれあんぢらが知るところにあらず。二六 されどあんぢらの
うちにては然るべからず。あんぢらのうち大なら
ふるものはあんぢらに事つるものとなるべし。二七 まことに

んぢ〳〵のうち首たらんとおもふものハ汝らの若きべ
〳〵あるべし 二八この〳〵のごとく人の子のきたるも人をつかふ
たるゝにあらず仕へんびとよつて人の生命を贖ひ
のために生命をあたふるなり 元この道
ら エリコをいで〳〵きゝ盲ほく〳〵のひとゞ耶蘇よきたるを
三羊 ふたりの瞽者みちのかたはらにすわりゐ耶蘇の
きたるをきゝてさけびいひけるハダビデの子主よ
をあはれみたまへ 三衆これをとゞめてだまれといふ
愈さけびいひけるハダビデの子我をあはれみたまへ
たまへ 三耶蘇たちどまりてこれをよびいひけるハなんぢ

らに何をなしてほしきや 三耶蘇よいひけるハ
主よ我らの目のひらんことをねがふ 三耶蘇おもひ
その目に手をつけたまへばたゞちに見ることをえ耶蘇に
したがひゆく。

第廿一章

1 この〳〵橄欖山のベツパゲよりエルサレムにもちうづ
けるとき耶蘇ふたりのでしをつかはしてこれにいひけるハ
2 なんぢらむかひなるむらにゆけ。やがてつながれたる
驢馬のその子とゝもにあるをみん。ときて我にひきたれ
3 もしなんぢらに何ごとのいふものあらばわが主の用
あるといへ。さらばたゞちにおくりやるべし 四預言者

のこゝろを視よ汝ら柔和にして驢馬に
乗る者すなはちシヨンの女子につげよ五
いへるごとくなんぢの王なんぢに來る
耶蘇のめいぜーごとくなせんためなり六門徒ゆきて
おのれの衣をその驢馬とその子をひきたり
衆おほくいその衣を途にしきあるひは樹枝をきりて
みちにしきぬ九うしろ前にゆき後にしたがひよびい
ひけるはダビデの子ホザナよ主の名によりてきたるもの
さいはひあり至上にホザナよ〇十耶蘇エルサレム
にいりたるときみやこもさわぎていひけるこれ

たゞ[illegible]や十一衆いひけるこれガリラヤのナザレ
よりいでたる耶蘇なり〇十一いま過越を神のみやにいりてその
うちにあるもの皆をおひいだし兌銀者のだ
い鴿をうるものの凳をくつがへしたふ十二いひけるは
かの殿は祈禱のいへとゝなへらるべしと記るされたり汝らは
これを強盗の巣となせり十三盲者あしなへ
のひとゝ殿にいりて耶蘇にきたりしかばこれをいやせり
ぬ十四さいしのをゝと學者たちその奇事をみ
またこどもらの殿にて「ダビデの子ホザナよ」
いふをきゝていかりて十五耶蘇にいひけるこれ

ぶりよこゝろをきゝ〳〵や耶蘇こゝていひけるん ちのゝ子のくちよ讃美をそなへたよまぐるう 十七 遂よこの邑〳〵をまわりみやをといでベタニヤよゆきそこよやどをとり ○十八 翌朝 まぐ 十九 みちのほうりよあるこの無花果のきをそそのこゝろよきゝとり葉のほかうよなきよりのちのちまでも果をむすぶことをえざるよこのれね 二十 門徒 ひたまひけまば 無花果たちどころよかれやうをそれおやゝひけるハいかにやきや 二十一 耶蘇 こゝろよてこの邑〳〵をまわりよひけるハまことよ

あんぢ〳〵よつげんをー信仰ありてうたがはざれこの無花果よおけるごときのゝみならぞこの山よ命じてよりうつされて海よいれよとゝいふともまことあらん 二十二 うらあんぢ信じていのり〳〵ばねがふところ殿よりてをゝくたるべし 二十三 いゑをゝしへ祭司のをさおよび民の長老だちきたりいひけるハなの權威をもてこのことをあをや誰このげんゐをあんぢよあたへしや 二十四 耶蘇 こゝてこの邑らまいひけるハ一言あんぢよとはんそれよその〳〵ことをつげあかさばわれもまた何のけんゐをもてこのことを行ふかを 二十五 ヨハネのバプテスマをいづこ

よりぞ天より此人よりこの事を論じ給ひけるに
四一天よりといもぐさべあるを信ぜざるくいたん
三五人よりといもぐさべあるを信ぜざるくいたん
を預言者とそれをありヨハネ
耶蘇こゝをよいひけるいまもるの權威をもてこゝを
あまたのあんちゝよこのくて次子のごとくいひ
るくふくりの子あゝが長子よ
けよわが葡萄園よゆきてたゝ
しづのち悔てゆきたり三まくのごとくいひ
けるよこゝて君よゝをゆかん
ざりきこのふくりのものいづれの父のむねよまことに
うをらいひけるに長子ありて耶蘇こゝをいひけるに
くよあんちらよつげん税吏および娼妓はあんじらよりさき
きよ神のくにまいるべし三それヨハネたづねきて
きくりしよあんぢらこゝを信せざりあるにあんぢ
らこれを信じたりあんぢらこゝをみてのち悔改めて
ゝを信ぜざりき〇三まく一のたとへをきけ。ある家のあるじ
ぶだうをつくりかこひをめぐらしそのなかに酒槽を
ほり樓をたて農夫にこれを作らせて
ちのつきけゝをたその果をとらんために僕をのくふのとき

よつのたとへ 三五 農夫ども そのしもべたちを ところ〴〵 一人を
むちうち 一人を ころし 一人を いしてうち 三六 またほかの
僕をまた より多く 初めつかはしけるところも 皆おなじ
ごとくあせり 三七 わが子 ハうやまふべし その子を つかはせ
よ 三八 のうち 三九 いひけるハ 嗣子 あり いでこれを ころし その
ものを 我らの 嗣業を 四〇 とらん 葡萄園 より 逐いだして ころせり 四一 されば
ぶだうを つくりし 主きたらん ときは 此 農夫 四二 どもを いかに
すべきや 四三 耶蘇 いひける 悪人 ハ 悪く 滅し 期 に およびて その
ぶだうを 果 に 作る ほかの 農夫 どもに 四四 これを 與へん
ずや 四五 耶蘇 これを 聖書 に 工匠 の 棄たる 石 ハ
隅の 首石 と なれり 是 は 主 の 為 し たまへる ことにて
我らの 目に おやしと 見ゆる なり と あるを 未だ
讀ざるか 四六 故に 汝らに 告ん 神 の 國 ハ 汝 より 取 られ
その 果 を 結ぶ 民 に 與へらるべし 四七 この 石の 上に 落る
ものハ 壊 これ 石 の 上に 落る ものハ 打 くだかれん 四八 祭司
つかさ バリサイの人 これ たとへ を 聞 て 己 が 事 を 言 へる
を 知 り 四九 耶蘇 を 捕 へ んと 思 ひ しが 民 を

おそきものぞ ひとびと預言者をもとおもへり
第二十二章 耶蘇 またかれらに譬をもてまた語りけるは二天
國にある王その子のために婚筵をまうくるがごとし 三 こ
んえんに請おけるものをむかへて婚筵にきたらんために僕たちをつかは
せしに 四 かれらきたらざるをもてまた他の僕たちをつかはしてい
へるは請おけるものに示せ 視よ我わが筵をととのへたり わが牛
と肥畜をもほふりてことごとくととのへたり婚筵にきたれと 五 かれ
らおのれおのれの貿易にゆけり 六 ほかのものどもはその僕

たちをとらへ〳〵そうのーめてころせり 七 王これをきゝていかり
軍勢をつかはしてそのころせるものをほろぼしその
邑をやきたり 八 こゝにおいてその僕どもにいひけるは婚
んえんまことそなはれども請たるものは客となるにたらず
ざるものゆゑわれ街ゆきてあふほどのものを婚筵にまね
ねけ 十 そのしもべども途にいでてよきものをもあしきものをも
あふほどのものをことごとくあつめければ婚んえんのきや
かは充滿ぬ 十一 さて客をうんどそのとき礼服をきざるものあ
りしを見て 十二 いひけるは友よいかにしてなんぢは礼服をきずし
てこゝにきたるぞ。この人默

然たるを十三つひよ王ゐるべくこいひけるはこのを[の]手足を去をりてそその幽暗まるげいでせそこまでこまで七切歯まることあるん十四それよるまえまるまでものくおほーといくどでいこのるーてっこのをいひあやまらせんとおひをうり十六その徒弟とへロデの黨をつてまんぢは眞なるものあり。まてまた誰なるをこうざることよりて人をとざるあり人税をカイザルよをさむるはやあーきやまんぢいうておよをわをまつけよ十七耶蘇その惡をしるていひけるは偽善者よまんぞわをところむやえ十八らんせいの銀錢をてみせよう道らデナリ一を耶蘇よもちきうーこ十九てよいひけるこの像と號はたるの三こうくてカイザルをいふってよおいて耶蘇こうきてまいひけるはさばカイザルのものはようくーまで神のものは神よこきく奇として耶蘇をさりやけて二〇三復生るーといひあせるサドカイの人この日は近そまきりふて二一いひけるは師よモーセのいくる人ー子るくしてをるば兄弟その妻をめぐりて子をうきやうだいのあるを嗣をべーと二二こ

こと[illegible]の中[illegible]きやうだい七人ありしの兄めとりて死
こもきくか ゆゑなくその妻をめとりてこどもをあくをり 二六 その二は
の 二五 その七まで こどもる然を 二七 その婦もまつくちよたも
六 よくこづくるときこのそんなる七人のうち誰のつまくある
べきてのこと[illegible]こるこのことを娶しものをべきをり 二九 耶蘇こたふ
てこのをくよいひけるハあんちくの聖書をも神のちからをも
をくざるよりておやまをり 三〇 そを嫁をそんまある神のつくひたちのこと 三一 死しも
のくよみがへることこと[illegible]きてハあんちくの神
ひしこと 三二 言ふ 三三 まをん アブラハムの神イサクのこうヤコブのこう

ありとあるをいまざよまざるのそもくの神はちよもも
神よあくを生ものくこのこをり 三三 ひとびとこれをきゐてその
訓をおどろけり 三四 ○ 耶蘇サドカイの人をひとこと
めたりときゐてパリサイの人をひとこころよあつまりける
が 三五 その中あるひとりの教法師い 三六 師よおきその
よそみて ひけるハ そのうちいづれの誡うおほ
いある 三七 耶蘇こたへけるハあんちの心をつくし精神をつ
くし意をつくして主あるあんちの神をおいもべし 三八 これ第一
よして大あるいましめなり 三九 第二もまたこれおなじ
のをのごとくあんちの隣をおいもべし 四〇 その律法と

預言者ハこのふさわしきものいまひとり
人のあらまほしきとき耶蘇こゝにきたりて
んぢ〳〵キリストまついていうよりおもやこゝろたるものの子ある
ら。こゝろて〳〵耶蘇よいひけるハダビデの子ありこゝろよい
ひけるハさて〳〵ハダビデ聖靈よりこゝろを感じてわが主ゆゑこゝろを主と
もるゝやダビデつゝ品主わが主よいひけるハわれなんぢ
の敵をなんぢの足のもとよりおくまでわが手の右よさせ
よと。さもバダビデおそでよこゝろを主とゝなくたれバいうで
その子なんや呉たゞ一言こゝろもよこゝろるこゝろあるそれ
この日より敢てまさそよものあらず

第廿三章 そのゝき耶蘇ひろく門徒とつげていひけるハ
二學者〳〵パリサイのひとハモーセの位よさせ三ゆゑなまべ
てこうもつがあんぢ〳〵まふとをれどこのもつが行〳〵ろをなすべし。さ
ふのゝーてまこゝろをざれど四まさこのもつ〳〵重うつ
負ごき荷をくゝりて人の肩よおもせおの指をもてこゝもをうごうもこらとせ〳〵このまぞ五この行
いまべて人よみらるゝんがためなるあり。その佩經をそゞひ
ろ〳〵その衣のもそをおほいまつ六また筵席のこうざ會
堂のうざ七市上のおいさつ人々よりラビ〳〵ラビ〳〵とるゝ

らをんこゝをこのむハなんぢ〳〵ハラビのゝゝをうくるこゝとなかうれそいなんぢ〳〵の師いひとりをもちキリストなりなんぢ〳〵いこゝろ兄弟(きやうだい)なり九まゝ地(ち)よあるものを父(ちゝ)とゝなのるこゝとなかれなんぢ〳〵の父(ちゝ)いひとりをもちてハいまそものなり十まゝ導師(みちびきし)のゝゝなのるこゝとをうくるこゝとなかれなんぢ〳〵のだゝいひとりハちキリストなり十一なんぢ〳〵のうち大(おほき)なるものハなんぢ〳〵のしもべとなるべし十二おほよそみづ〳〵を高(たか)くするものハひくくせらるゝべし又ひくくするものハたかくせらるべし十三あゝなんぢ〳〵わざとひなる偽善(ぎぜん)なる學者(がくしや)とパリサイのひとよそなんぢ〳〵天國(てんごく)を人

のまへにとぢてみづからもいらずまたいらんとするものをもいらせざればなり十四あゝなんぢ〳〵わざとひなる偽善なる學者とパリサイのひとよそなんぢ〳〵寡婦(やもめ)の家をのみいつそりておほき祈(いのり)をなすそゆゑによりてなんぢ〳〵重刑(おもきつみ)をうくべければなり十五あゝ禍(わざはひ)あるこうかぎぜなんぢる學者とパリサイのひとよそなんぢ〳〵おほねく水陸をへめぐり一人(ひとり)をもおのゝ宗旨(しうし)にひきいるれバこれをなんぢ〳〵よりもまさる倍したる地獄(ぢごく)の子(こ)となせり十六あゝなんぢ〳〵わざとひなるうかぎ督者(かんしや)あるてびきよなんぢ〳〵いふ人(ひと)もし殿(でん)をさしてちかひをなすハそハ事(こと)

殿のことでもそうべつべつてちうそ
うしてめしひあるものよ金とこうかねをきようこうもる殿
うえいづもまったみよとき六まさいよ人のまりの壇をき
してちうそ、こと事そのうへの供物をさしてちうそ
そもくべつべうをと光憑よりてめしひあるものよそそもく
のと供物をきようこうもる祭壇へいづもまったみよとき三千
そもまるまのだんをさしてちうそ讐ものはまるその壇もりそ
のうへのをべてのものをさしてちうふあり三まる殿をさ
してちうよりものは殿あすびそのうちこいまそものをさ
てもうよあり三まる天をさしてちうよものは神の寶座お

ようびそのうへこさそるものをさしてちうよあり〇三あら
あんぢらわざはひあるうわべ偽善ある學者らパリサイのひと
よそんあんぢら薄荷茴香馬芹の十分の一をとりをそなめて
おきてのおもなる義と仁と信とをそろんちらいと廢こ
と勿きこあるべきものありこれもまたなべうらざるもの
あり二四めしひあるてびきよあんちらは蠅をこいぶくて
駱駝をのむものあり二五あゝくやとパリサイのひとよあるこうわべ偽善あるお
きようくしてうちうは貪欲と淫欲とをこそせり二六めしひあ
るパリサイの人よあんちらまづ杯とさらのうちをきようくせ

よきゝバその外面もまつきよ
禍あるゝをなぎそぜんある學者とパリサイのひとよあんぢら
こゝろくぬりたる墳墓によたりそとうるもまつくのごとくあら
も内は骸骨ときたなきの汚穢まてみつ 六 あゝあんぢらパリサイ
ぢらもまつ外いたゝしく人にみゆるもうちは偽善と不
法とてみつ 元 あゝあんぢら學者とパリサイのひとよあんぢらわざ
人の碑をこうさまつ 三 祖先のときあ
らばようげんしやの血をあづかるにおゐてはわれらかれ
それあんぢら預言者をころせしものゝ裔なることを

みづから證を 三 あんぢらせんぞの量をみたせ 三 へびまむ
しのたぐひよあんぢら地獄のけいばつをまぬかるゝ
んや 三 このゆゑよわれあんぢらに預言者と智者と學者と
つかはさんこのあるひはこれをころしまたあるひはこれを十字架につけあ
るひはその會堂にてこれをむちうちまちをひとまちに 三五 義あるアベル
おひころしめん 三五 そは義あるアベル の血よりみやとまつり
の壇のあひだにて殺せしバラキアの子ザカリア
の血にいたるまで地よにながしたる義人の血はあんぢ
ちにもむくいきたらんまことあんぢらにつげん。このころかこの代にむくいきたらん 三七 あゝ

エルサレムよ エルサレムよ よげんしやをころすなんぢよ つかはされたるものを石なげうつ さよあつむることごとくせしことまたいくたびぞや 雞その雛をつばさの下にあつめんとせしごとくせしことまたいくたびぞや 汝らはこのまさりき 三八視よ汝らの家はあれすたれてのこされん 三九ときるなんぢらよつげん 主の名によりてきたるものは福ありときるなんぢらのいまよりわれをみざるまでは今よりわれをみざるべし

第廿四章

耶穌みやをいでてさりゆきたまふとき その殿宇をさしみせんとて 二耶穌にこたへていひたまふ なんぢらまことに汝らこれらを見ざるや われ誠になんぢらにつげん 石のうへに一つの石もこぼたれずしてのこるものはあらじ 三耶穌オリブ山にすわりたまふとき 門徒ひそかにきたりていひけるは われらにつげたまへ いつこのことあるべきか また汝がきたりたまふときこの世のをはるときのしるしはいかなるぞや 四耶穌こたへたまふ なんぢら人にあざむかれざるやう愼よ 五それおほくの人わが名をもちきたりわれはキリストなりといひておほくの人をあざむくべし 六なんぢら戰をいくさの風聲をきかんされどつつしめおそれこと起らのことはかならずあるべきなり末期はいまだ

らぶ七 民おこりてたゝかをせめ國は國にせめ饑饉疫病地
震ところ〴〵にあるべし八 これらは產の初なり
九 そのとき人あんぢらを患難にわたしあんぢらを殺
べし。また我名のために萬民にくまるゝ十
このときおほくの者躓きたがひにうらみ
らむべし 十一 また僞よげんしやおほくおこりておほくの人
をあざむくべし 十二 また不法さかるによりておほくの人の愛
情ひやかになるべし 十三 されどをはりまで先のふ者は
すくはるゝことをえん 十四 また天國のこのふくいんを萬民
に證せんためあまねく天下にいひひろめらるべし。きたる

のち未期いたるべし 十五 この
ゆゑに預言者ダニエルによりて
いはれたる荒すたるものの殘暴にくむべきものの聖處にたつを
讀ものよくおもふべし 十六 そのとき ユダヤにをるものは
山にのがれよ 十七 屋上にをるものはその家のものをとらん
とてくだるなかれ 十八 また田にをるものはその衣をとらんと
てかへるなかれ 十九 その日にめるものと乳をのますを
る婦いたましきかな 二十 汝らの逃るが冬または安息日にに
ることをまねこうもん たゞしの 二一 そのとき大なる
やくなりこのごとき災難は世のそのはじめよりいまにいた
るまであるべくまたのちもあるべし 二二 その日をそく

み〳〵せ〳〵をぢ〳〵一人だに生のこらん。されど
えらまれたる者のために其日は省〳〵らるべし 三
その時もしキリスト
らよりいづるものあるとも信ぜざれ
預言者だちおこりて
もしこあひえらまれたるものをも欺惑こゝをえべくば
ざるべければなり 三 わを
告よ キリスト野にありとも
室にありといふものあるとも信ぜざれ 三 そは電の
ひがしよりいでて西にまでひら〳〵めく〳〵人の子も

そのごとくなるべし 三 死
かばねのあるところに鷲おのづからあつ
ん 三元 こゝろ〳〵の日のなやみのゝち日はくらくなり月はひか
りをうしなひ星はそらより落ちくる人の子のしるし天にあらはるべし
そのとき地上のもろ〳〵の族かなしみて人の子の大なる權威と榮光とをも
て天の雲にのりきたるをうん 三 また大なるラッパの聲をいだ
したまひその使者たちをつかはしたまはん 三 かれら天のこの極より
のこの極まで四方よりその選ばれしものをあつむべし 三
三 そもそもいちじくの樹よりこの譬をまなべ その枝
やはらかになりて葉をいだすときは夏のちかきをしる 三 この

くのごとくなんぢらもまたそのごとくなすべき時にいたらば門ぢかくいたれるをしるべし
三四 まことになんぢらにつげんこれらのことをことごとく成すまではこの民はうせざるべし
三五 天地はうせんされどわが言はうせじ
三六 その日その時を知るものはなし天の使もまた子もしらず父のみ知りたまふ
三七 ノアの時のごとくに人の子のきたるもまたかくのごとくあるべし
三八 それ洪水のまえノアが方舟にいる日までは人ひとに飲食嫁娶
三九 などしてさらにわざいのきたることを悟らざりき
四〇 人の子のきたるもまたかくのごとくあるべし
四一 そのとき田にふたりゐんに一人はとられひとりはのこされ
四二 二人のうへんを磨ひきをりひとりはとられひとりはのこされん
四三 このゆゑに目をさましてあれ汝らの主のいづれの時にきたるかを知らざればなり
四四 されど家の主人は賊のいづれの時にきたるかを知らばそのゐんをまもりて
四五 やぶらせざるべきことを預備せよ汝らもまたおもはぬときに人の子はきたるべし
四六 時にあひて糧とこしへの主がその家の人どもの上にたてる忠義にして智
四七 なるしもべはたれぞ
四八 そのあるじきたりてかくのごとくつとめをるを見ばそのしもべは福なり
四九 まことになんぢらにつげんかれにその所有をことごとくつかさどらせん
五〇 されどそのしもべもしこころのうちにて主はおそくきたるべしと言ひ
五一 はじめて僕ともにうちたたきまた飲食をともにせば

ことあんぢらつげんそのの全業をなるこうをつうさぶ
をへーそのあーき僕おのづこころよわが主のきこと
るハおそうんとなめひ呪その傍輩をうちたゞきて酒よ
ろひたるものどもとそもよ飲食ーそめるがゞ辛そのーまぐ
の主おもそぶるの日ちゝさぶ
きりらろーそのむくいを偽善者とあるをゞーそこよ
てこのゑーと切歯するくあんん

第廿五章

そのとき天國ハとゝもー
いづる十人のむすめまぞらゞゞ二そのうちの五人ハ
このーらく五人いおろくのあり三おろのあるものゝその燈を

とるもあぶらをたづさへざりしが四智ものゝそのともしび
とゝもまあぶらを燃したりさへたり
けるこゝろ假寐してねむるうち六夜あつるまさけびてはぢ
むこきたりぬいで迎へよとよぶこゑありけるとき七この童
女どもみなおきてそのともしびを火をとゝのへたるまへ八愚か
るものこゝろきものまいひけるハわれらのともしびきえんとす
ねぶそくいあんぢらの油をわけあたへよ九このー
らきものこゝろていひけるハあんぢらとおそ
らくハ足まゞあんぢら賣者ゆきておのがためよろく十
このをつ買んとてゆきつゝき新郎きたりけるをでそるか

へたるものいらざるまで婚筵よいらざるに門はとぢ
ざるなり　十一　このゝちその餘のむすめきたりて
主よ主よわれらのために
らよまんぢらにつげん
つま　十二　さるべからざるぞ
ざるべからざるぞ
そのごとし　十四　天國はある人のたびだちせんと
してその僕をよび所有をこれにわたすがごとし
のおのの智慧にさゞひてあるものにハ銀五千あるものに
ハ二千あるものにハ一千をあたへおきたちて旅だち
ぜり　十五　五千の銀をうけしものハゆきてこれをそ

ほかの五千をえたり　十六　二千をうけしものも
千をえたり　十七　一千をうけしものハゆきて地をほり
その主のこゝろをこゝろぜり　十八　ほかくてのちその
ちの主こゝろをもてこれと會計せり　十九　五千のぎんを
ものその
のぎんをあづけしにほかの五千のぎんをまうけたりと
ひけるに　二十　主こゝろよいかな善こゝろ忠なるしもべ
そなんぢわづかなるこゝろ忠なりわれなんぢに多きものを
つかさどらせんなんぢの主のよろこびにいれ
銀をうけしものきたりて主よわれに二千のぎんをあづけ

一ぎんぼくうよ二千の銀をまうけたりと云ひけるに 三 主この主
よいひけるハあゝ善うちもちまうけたるまゝぞあんぢ寡な
るこゝろよちもうまうけり我なんぢよおほきものをつかさどら
ぜんあんちのわるゝの歡樂よいまよ 二 まこと一千のぎんを
うけゝものきうりていひけるハ主よあんぢハきびしきく
まてまうさるところより穫ちくさぐろより斂らくを
そきつゝ 三 ゆゑよまことおそれてゆき主の一千のぎん
を地よこのくゝあけを今あんぢのものを得たり 三 その
の主こうへていひけるい惡こうちくさる僕ぞあんぢ
が播ざるところより散さぐるところよりあつむるこ

とをあるとも 三 あつうこバわがうねを兌換鋪よおくべ
きあん。さらバわがくをたるとき本と利とをうくべ 二六
このゆゑよこの主の一千のぎんをとりて一千の銀あるもの
まおうべよ 二九 そもそもあるものハあらんまでなほあり
あり無有ものハそのもちものまでもとらるべけゝバあり
余無益あるしもんをそとのくらきところよおひやりそこなて哀
哭そがくまることてあらん ○ 三 人の子おのれのえいくうう
をもてそのろくの聖使をひきぬるときハその榮光のく
ゐぬよざし 三 萬國の民をそのまへよあつめ羊をやぎふもの
の綿羊と山羊とをわかつごとくこうもの三 めん

やうをその右よりやぎをその左よりあゝゞー言うゝて王その
みぎるものよりいたん。やく
ゝそ創世よりこのゝうさちんぢゝのためよそるくらをてゝろ
國を嗣言そんあんぢゝやお飢ーゝきゝそもよぐゝうさせ渇ーと
きゝるきゝのまさせ旅せーゝきゝそもをやぐゝうさせ三六裸るりーと
きゝゝるきゝまきゝせ病ーゝきゝるきゝをゝそまひ獄よおりーゝきゝるきゝを
よきゝてゝゝるバるり三五ゝてよおいて義ものこのをてよこゝうくていい
そん主よいつちんちのう名たるをゝて食せまゝこゝうきゝた
るよ飲せーや三八いつ主のたびーたるをゝてやぐゝうせまゝ
そぐゝのおくるよ衣ーや三九いつ主のやゝまゝ獄よおるをゝて

あんぢよいゝうりーや四十王てゝうきゝうよいちん三四逆誠
よあんぢゝゝつげんをでよあんぢゝうがての片弟のいゝゝ
ちひさきものゝひゝりよおこゝるくゝるかをるうちわきゝ行
ーあり四一つひよまゝ左よをるものよわきをきゝてそのつゝひのたゝめよそゝく
たるきゝを過ぎる火ゝいきよ四二そゝあんぢゝうがゝ飢ーゝきわ
きゝゝそもをせ渇ーゝきわきゝよのまさせぞ四三旅せーゝきわきゝを
やぐゝうさせぞ裸あゝーゝきわきゝよひゝやよお
まゝーゝきゝわきゝを顧ざきゝびあり四四ゝてよおいてゝうきゝなゝ
ゝゝていそん主よいつちんちの飢まゝ渇まゝ旅ーまゝ

裸まく病まく獄よ あるをとふらひ
とき王こゝろ〳〵てこの者ゝ〳〵いたん
つげん。らの至微まの〳〵ひとり
わ 為よおこあそぐり〳〵あり 哭 ら
刑罰 いてたゞ〳〵きまのいこのぎりあき

第廿六章 さて耶蘇このさまく
よのひげるい 二日のゝち 逾越節
ゝろあり。そ 人のこゝ 十字架
さゝゞ〳〵 三 こゝきさい〳〵
カヤパ〳〵くる 祭司のをきの庭 あつまり 四 詭計

をもて耶蘇をゝ〳〵ころさんこゝろぐさりひける
い 五 まつその日まいあそぐ
亂おこらん 〇六 耶蘇ベタニヤの癩病シモン
つるとき あるをんな 蠟石のうつもものまあつたるき
香膏をもりて耶蘇の食する
ぎ〳〵 ゞいへでゞ〳〵ちこをそ
この藥費のゝをあそゆえぞや 九 〳〵こをう
ばあはく〳〵の金をゝてまつ〳〵ひは
耶蘇 ちりてこの〳〵よりひは善事をおこ
をやこの者いわ〳〵よて 善事 おこ
十 なくるあり 土 まつ〳〵きもの

ハつねよあんぢ〳〵〳〵もよあ
〳〵もよあゝぞ 三 うゑおらのう
そぎ〳〵ハわ 廿 の葬のためよあ
んぢ〳〵つげん 天の下 ゆづく
る〳〵ろろこのをんあのも
めよひ〳〵くらべ〳〵 〇 十 そ
あゝのイスカリオテのユダ〳〵く
る〳〵よきて ゆひけん 廿五 廿 あ
あのほ〳〵をあるう。つゐよ 銀 三十 て 約 〳〵たりまくの
ときより 耶蘇 をわ〳〵ん〳〵 機 をうゞひぬ 〇 またねいま

ぬ 餅 のいとゐのもめの日 耶蘇 よきりひけん
〳〵をきこの 食 をあんぢのためのいつるそあゝ
きや 六 耶蘇 いひりるみやにり某よりてゆく 師
ゆゝの時ちつきりまゞわ 廿 てゝ 耶蘇 よ 逾越 のいた
ひをあんぢが 家 よおをべゝと 丸 てゝ 耶蘇 よ 命 ぜ〳〵 廿一 ご
〳〵してをぎこの 食 をそあゝ 十 日 〳〵 廿 とき 耶蘇 おゝ
まで〳〵もよ 席 よつき 三 食 もるときひけん 廿 まこ
こそよあんぢのうち一く 廿 わをわさ
をゝり 三 うゑ〳〵くらひておのく 耶蘇 よいひいでけ
るハ 主 よそれあるその 三 こそ 廿 ひけるハわ 廿 〳〵もよ

手を盂につくるものいまをわづかものあり 二四
人の子はおのれをつけてもろもろの人にあなどられ逐んさるるごとく逝んさるべし
人の子をわづかるものにわたさるるこのそのひとうまるるはさいはひあらん 二五
まことにまことにいふ幸ありしものあらん 二六
さていひけるラビわれやいふけるハあらんや。こたへていひけるハあり
おのいくるごとし 二七 うまるとき食するとき耶蘇パンをとりて祝し
これを擘でこれにあたへていひけるとりて食へわが身
あり 二八 まことにまことにつきをとりてわれ謝しこれをくだきていひ
けるとりて飲めこれはわが新約のわが血
のものにして多くのひとのためにながされてとの
こころのゆめあり 二九 まことにまことにつぎよりのちわれ
ぶどうのをわが父の國にてあたらしきものをわれ
でふたたびこの葡萄のをのまでわれ
まことをうけてのち橄欖山にゆけり 三〇 そのとき耶蘇
うまとよいひける今夜あんらうるわれにつきて
づうんそは牧者をうたば群のめんやうちらんとあるに
されたまでまたあり 三一 されどわれ復生てのちあんちらにさきだ
たんカリラヤにゆくべし 三二 ペテロこたへていひけるたとひ
いこあなんちにつきて躓くとも躓くことなかるべし 三三
耶蘇いひけるまことによいひけるまことにあんぢにつげん

よひ雞なかざるまへになんぢ三次われをしらずといはん 三五
ペテロかれにいひけるはたとひ主とともにしぬることありとも
なんぢをしらずとはいはじ門徒もみなかくいへり 三六 そのとき
耶穌かれらとともにゲツセマネといふところにいたりて門
徒たちにいひけるはなんぢらここにをれわれかしこにゆ
きていのらん 三七 ペテロおよびゼベダイのふたりの子をたづ
さへ憂愁をもよほし 三八 かれらにいひけるはわが
心いたくうれひて死るばかりなりここにとどまりてわれとと
もに目をさましをれ 三九 すこしさきにゆきて俯伏いのりい
ひけるはわが父よもしかなはばこの杯をわれよりはなち
たまへされどわがこころのままをなさんとするにはあらず
聖旨にまかせたまへ 四〇 きたりて門徒はねむりそのいねた
るを見てペテロにいひけるはなんぢら一時もわれとともに目
をさましをることあたはざるか 四一 なんぢら誘惑にいらぬやう儆
醒ていのれそのたましひはいさめども肉體はよわき
なり 四二 ふたたびゆきてまた祈禱いひけるはわが父よもし
ならずばこのさかづきをのまずしてかなはずば
みこころのままになしたまへ 四三 きたりてまたかれらの寝たるを
みるかれらの目つかれたるなり 四四 かれらをすてはなれて
またゆきて第三次もおなじことばをもていのり 四五 つひに

その門徒ら來りていひけるは今いねてやをも時はも
この一人の子つれびとの手よりわれをもん 四六起よりゆ
べしわれをうちそなのちからづきたり○四七こういへるとき
十二のひとりなるユダ刃と棒とをもちくるもほくの人々
とともにさいしのもとより民の長老のもとよりきたる四八耶蘇
をうちそむけんとて號をさだめていひけるはわが接吻をす
るものはそれなりこれをとらへよ四九たぢちに耶蘇よきたり
てラビやをきこといひてうけれよろちつけを五〇耶蘇こたへ
ていひけるは友よなんぢのきたるやといひよこれをとる
みきたり手を耶蘇にかけてこれをとらへぬ五一耶蘇ここに
ありものひとり手をのべ劍をぬきてさいしの長のものを
うちその耳をそぎおとせり五二耶蘇このひとりにいふは

んぢのつるぎをもとにをさめよ。もろべて劍をとるものは
つるぎをもてほろぶべし五三われいま十二軍餘の天使をわがも
ちよ求てうくることあたはざらんやいかで五四聖書はいふ
然せざるべからざることをもとせんや○五五このとき耶蘇ひと
びとにいひけるは汝らわれを强盜をとらふるごとくに劍と棒と
をもちてぬきそひとをとらふるごとくしてきたるか我は日々
なんぢらと殿にざしてをしへしにわれをとらへざりき五六
されどこれらのことは聖書のことばをまことならしめんが
ためなりき○

ふこゝる預言者のもろ〳〵たるこゝろよ應成せんためなりつ
ひよでーたちこゝる耶蘇をとらへてまげさりぬ○五七耶蘇を
とらへたるものこゝをひきて學者と長老のおらまるこゝ
ろの祭司のをゝさカヤパよつをゆく五八ペテロはるかに
耶蘇よもとゞひ祭司のをゝさの庭よまでいりその結
局をそんとて内よいりもまべ〳〵もまさもり五九さいーの
をさたちおよび長老をべての議官こゝもまよ耶蘇をころさん
とて妄證をもとむをとゞもおほくのいつさりの證
者きたりをまこゝをもまこゝぞ後まつさいつさりのおらーひと二人
きたりていひけるは六〇この人さきよいくることありつをも

よく神のみやをこぼちて三日のうちよこゝをたて建おこすべ
しと六一さいーのをゝ起ていひけるはあんぢなにもこたへ
ふることなきやこの人々のあんぢをせめていふ證據はいかよ
六二いよも黙然たりさいーのをゝいひけるはあんぢよたこる證
あんぢキリスト神の子あるこゝをわれらよいへとをゝせてこゝをつげーめん六三耶蘇こたへ
いへるごとーうつをもあんぢよつげんこのちくの子
大權のこゝぎよざー天の雲よのりてきこるをあんぢらこる
べーと六四こゝよあらて祭司のをゝさそのころもを裂ていひけ
るはこの人いけづをこゝをいくりぞあんぢよもようこ

をまくめんやぁんぢらも今その襃濆たることをきゝ奈あ
んぢ〳〵のまゝおもふやうにてくていひけるハうもん
死よあくまでり空にてこのことをその面へつぎこゝ
つ拳にてうちてりまさある人をたゞきいひけるハ汝
キリストよあんぢをうつものハ誰ぞうつことよげんせよ○
六九 ペテロ ソトに坐しみけるまへ門ぐちへいでゝ門
がりラヤの耶蘇とともありしあんぢも
人のまへにてこのことをうけがひけるぞしてペテロまたべての
ふゝこゝろをきらをつくをあんぢのい
きまく他の志ものゝことをそそをするものゝいひける

いこの人もナザレの耶蘇とともありきと七〇 ペテロ
けがのぞして誓をもてこの人をしらずといひ
うつもちよりて立るものまたみへてペテロにいひけるハ
まことなんぢもその黨のひとりあり
あんぢをあらはせり七一 こゝにおいてペテロのろひうつ
ちくひてをもてその人をしらずといひ
七二 ペテロ耶蘇のにはとりあくのざるまへあんぢ三次
きらんぞといひたまふるを
いそく悲慘おけり

第廿七章 平旦にありてまべての

共にあつまりて耶蘇をころさんとし 二 これを縛ひき
ゆきて方伯のポンテオ ピラトにわたせり〇 三 ここにおいて
耶蘇をわたせし ユダ この者の死にさだめられしをみて悔
その銀三十をさいしのをさ長老だちにかへして 四 いひけ
るは無辜の血をわたしわれ罪を犯しぬ。かれらいひけ
るはわれらにおいてなんぞ與らんやなんぢみづから當べ
し 五 ユダそのぎんを殿になげすてしりぞきさりゆきてみ
づから縊たり 六 さいしのをさたちこの銀をとりていひけ
るはこれ血のあたひなれば賽錢のなかにいるべからずとてそ
七 さらにはかりてこの銀をもて旅客をはうむるために陶工
のはたけをかへり 八 故にそのはたけはいまにいたるまで血田と
なづけらる 九 ここにおいて預言者エレミヤによりいはれし言に
るところぞはイスラエルの民にねぶみせられ價せられしもののあ
たひの銀三十をとり 十 主のわれに命ぜしごとくやきもの
しのはたけを買ぬとあるにかなへり〇 十一 さて耶蘇つかさ
のまへに立つかさ耶蘇にとひけるはなんぢはユダヤ
びとの王なるかと耶蘇これにいひけるはなんぢがいへるごと
し 十二 祭司のをさ長老だちこれをうたへども何事の
こたへもせず 十三 ここにおいてピラトこれにいひけるはこ
の人々なんぢにたつる證のかくおほいなるをなんぢきかぬ

ざるこの方伯のいとあやしとおもへるまでに耶蘇ひたすらこれを
ゆるさせざりき　二このまつりの日には方伯より民のねがひ
ひとまうせてひとりの罪人をゆるすその例あり　三ときにバラバといふ
人のあらまりしときこれもまたいひけるはバラバかキリスト
とのふたりの耶蘇をゆるさんとおもふやこれを娼妓よりて耶蘇を
○五方伯さばきの座にをりしときその妻いひつかはしけるは
汝とこの義人とにかんちがふことなかれ我けふ夢のうちにこのために
いたく苦しめり　六祭司の長老たちバラバをゆるさんことを民に
すすむ　三方伯またこたへていひけるはいづれのふたりのうちいづれを
ゆるさんをわがあんちよとにかんちがふことなかれ　三ピラトいひけるはさらばキリスト
とよばるる耶蘇をばいかにせんをもべきか。衆のもの十字架につけよと
いふ　三ピラトいひけるはこの人のいかなる惡事をなせしやこの
もの益〻さけびて十字架につけよといふ　三ピラトその
言の益なきを見てたゞ騒のおこらんことをもり水をとりて
ひとびとのまへにて手をあらひいひけるはこのたゞしきものの
血につきてわれにつみなしなんぢらみづからこれを當たれ

みこゝろにてゐひけるいその血いつゝとゝまりて十二年
孫よこうへさるべし一 二六 こゝよりおいてバラバをゆるし
一耶蘇をむちうちてこゝをたゝ 二七 つかさの兵卒いそ
をそのもとゝあつめ 二八 うゑをのこゝろもそむきそ
袍をきせ 二九 いばらの冠をあみてその首はこのむし
葦をみぎの手よもたせうそ
ていひけるゐユダヤびとの王やそうを 三十 唾一そ
の葦をとりてそのこうべをうてり 三一 こゝろうしをそりて
そのうゑをきせて衣をもとのごとくきせて十字架につけん
とひきゆく 三二 そのいでしときクレネびとのシモンと
ふものよあひけるを強てこゝろをその十字架をおそもて
至〇 三三 うゑゝゝコルゴダ譯がいをゝゝところにいたりし
きこゝろ 三四 醋よ膽をあたせて耶蘇よのまんとしたりしが
嘗てのむことをせざりき 三五 うゑゝゝ耶蘇をおゝどうまつけ
しのち鬮をとりてそのころもを分こうを預言者のことをよ
うゑたがひよわが衣をわけわが裏衣をくじをもとりび
しよのあこゝろ 三六 兵卒こゝよりざゝて耶蘇をまもりまこ
罪標よこゝをゝユダヤびとの王いをありとあるこゝをそその首
のうへよおけを 三八 そのとき二人のぬすびと耶蘇とゝもよ

ひとりはその右ひとりはその左に十字架につけらる○三九ゆきしのもの耶蘇をのしり首をふりていひけるは四〇殿をこぼちて三日にこしらるものよみがへらんむもし神の子なるべし十字架よりおりよ四一祭司の長がしや長老だちもまたおなじくしりぞきて嘲弄していひけるは四二人をもすくひておのれが身をすくひえざるなり神のイスラエルの王たればいま十字架よりくだるべしさらばわれこれを信ぜん四三この人神よりたのめりいま神もしこれをいつくしまば今すくひ給へ神の子なりといひしによりてなり四四ともに十字架につけられたる盗もおなじく耶蘇をのしりぬ

四五晝のおほよそ三時よりくらくなりて九時までその地あまねく黒暗となる四六耶蘇おほごゑエリエリラマサバクタニとよばゝりぬ。こは譯ばわが神わが神あんぞ我をすてたまふやといふなり四七ここにたちさぶらふもの聞てこの人エリヤをよぶるなりと四八そのうちある人こゝにきたりて海綿をとり醋をふくませこれをよしをもてつけて耶蘇にのませむ餘人いひけるは四九俟エリヤきたりてこの人をすくふや否やをみんと五〇耶蘇また大聲をよばゝりて氣たえたまふ五一みやの幔うへより下まで二ところにさけて地ふるひ磐さけ五二墓ひら

けてさてでよ いねる聖徒の身おほくよこのくり耶蘇のよみがへるのち 五三 墓をいでゝ 聖城よりおほくのひとゝあらはれたり 五四 百夫の長ゝまた耶蘇をまもりたるものゝ地震およびそのありしことを見て甚おそれまことに神の子ありといへり 五五 このところに遥よりのぞみるおほくの婦ありしがガリラヤより耶蘇にしたがひつかへしものどもなり 五六 そのうちよりてまぐだらのマリアとヤコブヨセのおやたちの母とゼベダイの子らの母とあり 五七 夕になりて耶蘇のでしなるヨセフといへる アリマタヤの富人きたりてピラトにゆき耶蘇のしかばねをこひしかばピラト 五八 その屍をわたせと命ぜ 五九 ヨセフ之をとりて きよき泉布にてつゝみ 六〇 おのれのあたらしき墓にをさめおきおほきなる石をはかの門にまろばしてさる 六一 まぐだらのマリアとほかのマリアとも墓にむかひて坐しそこにをれり 六二 預備日の翌日 祭司長パリサイのひとびとピラトのもとにつどひきたりていひけるは 六三 主よわれらおもひいづるに此ものまだいきてありしとき三日の後よみがへらんといひ 六四 ゆゑに命じて三日までは墓をかたくまもらせよ おそらくは弟子きたりてかれを盗みさりて死よりよみがへりたりといはんことを恐るなりと

民よいたんをうつゝバ後のまうくるべし
一 五 ピラトこのをうなよいひけるは守兵いあんぢらにありゆきておのもひのまゝにこのえをしめよ 六 こゝにおいてこの老ゆきて石に封印をまうるものをして墓をうかゝへたり

第廿八章 安息日をへてのち七日のそもじめの日よあけごろ

一 マグダラのマリアおよびほかのマリアその墓をこんとてきたりしにおほいなる地震ありて主のつかひ天よりくだり墓のもんより石をまろばしてその上に坐をり 三 その容貌いなづまのごとくその衣服いゆきのごとくしろし 四 守兵これをおそれおのゝき死たるものゝごとくなりぬ

五 天使こたへてをんなよいひけるはなんぢらおそるゝなかれ十字架につけられ耶蘇をたづぬるをしる 六 かれこゝにあらずもとのごとくよみがへりたまへりきたりてかれのおきたまひしところを見よ 七 復生たりとあんぢらきたりて主のおの〳〵のもとにいたりてかれ死よりよみがへりたまへりとつげよこのうえなおんぢらにさきだちてガリラヤにゆけりそこにてかれをあんぢらに告ん 八 をんなおぢうこのをそれとよろこびて急たちのぞさりその門徒につげんとてゆくときに耶蘇うつりたまひけれバ婦よりてみその足

をいだきて拜しぬ 十 耶蘇こうまうしけるは おそるる
うたがりてわが兄弟ヨガリラヤにゆけとつげよ ここにて
我をみやこうまうしをるべし 一〇 土婦のうたがりをるべ
ども みやこうまいりをりをべてあり 一一 こをを祭司の
つげしをべき こうもうし長老あつまりて 一二 議あほく
うねを士卒にあたへていひけるは 一三 うんぢらいふべき
いるたるときその門徒よるきたりてこのこをを方伯にきかるゆ
るとも わをこうもうしをめてあんぢら憂慮あるべからず
らめうたがりをるごとくなるべし 一四 於是こうのごときをを今え

日よりいでるまでユダヤ人のうちに言ひふらめりき 一五 ○
十一の弟子ガリラヤよりゆきて耶蘇のこうまうし命じたまひ
ふところの山にいたり 一七 耶蘇をみて拜せり 一七 さりども
るものもありき 一八 耶蘇きたりてこうまうしていひける
は 天のうち地のうへのすべての權をわがたまはれり 一九
このゆゑにあんぢらゆきて萬國の民をバプテスマをほどこ
し 二〇 こをを父と子と聖靈の名によりてわれこうまうしを
すべてあんぢらに命ぜしこうまうしをまもれとこうまうしをし
よ それわれは世のをはりまでつねにあんぢらとともにをる
なりアーメン

馬太傳福音書終

ヰは皮帶をむすび蝗蟲と野蜜をくらへり○うきのべつとへけるハ我よりまさるものゝ後よりきたらんとをいふ屈てその履のひもをとくにもたらず○我はバプテスマをほどこせしがごとくに聖靈をもてあんせらるゝバプテスマをほどこすべし○カ

ナザレよりきたりヨルダンにてヨハネよりバプテスマをうけやがて水よりあがるとき天ひらけ聖靈のごとくに己にくだるをたり○天より聲ありてふんぢは我愛子なり我これをよろこぶ○

耶蘇ガリラヤにゆきて神の國の福音を宣傳へ○いふ期は滿てり神の國は近づけり汝ら悔改めて福音を信せよ○耶蘇ガリラヤの海邊をとほりしにシモンとその兄弟アンデーの漁者なるが海に網をうつをみる○蓋しハ漁者なり○耶蘇かれらにいひけるハ我とともにきたれ汝らを人をとる者となさんと○すなはちその網をすてゝこれにしたがふ○またすこしすゝみゆきゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネの小船のうちに網をつくろふをみてすなはちかれらをよびたれバ○かれらその父ゼベダイを雇人とともに船にのこしてこれにしたがへり○

いヨハネの舟にありてあみ
をつくろふをみて 二十 たちまち
もろともよびたまひしかばすぐにその父ゼベダイと傭人とをも
ねのこしてこの後よ あるひ
たる耶蘇をみちに安息日よ會堂
に三人々々そのそばにくるまにて
るるを攻撃をもてるものあり
その會堂にけるに 二 枯
けびひけるがありしが
の耶蘇 一 三 あんちおと
おしへやあんちきりすと
ちがひ誰るるかいまだ神の聖
耶蘇

こゑを責てひとりのけがれたる靈をいでよ
と 二十五 汚 ひるおよびその人をひきつりなせ大聲をいでたり
をとゝでたり 二十六 衆 ふるひ相とゝひていひけるは
何ごとぞやこは 二十七 教 けがれたる鬼
さくりんおもて命じけるあるとさ
耶蘇のきこゑあまねくガリラヤの四方ひろりぬ 二十九 ○
會堂といでヤコブおよびヨハネ
シモンアンデレーの家にゆきたり 三十 シモン のそうめ 熱
をやみてふしおけるあるをたちまちこのことを耶蘇
三 耶蘇 その手をらりこをおこしけるに 熱

ちさりぬ。かくてその婦かれらに供事たり 三二 ゆふぐれ日の
いりしとき人々すべての病をわづらへるもの鬼につかれた
るものを耶穌にたづさへきたる 三三 その邑こぞりて門にあ
つまれり 三四 耶穌さまざまのやまひとわづらへるおほくの人
をいやしまたおほくの鬼をおひいだし鬼のものいふ
ことをゆるさざりきそは鬼かれをしりたるによりてなり○
三五 夜あけまへに耶穌はやくおき人なきところにゆきそこ
にて祈禱せり 三六 シモンおよびかれとともにありしものど
もその跡をしたひゆき 三七 かれにあひていひけるは衆みな
なんぢをたづぬ 三八 耶穌かれらにいひけるはわれら
道をのぶるためになんぢらともに近郷のむらむらにゆかん。
われこれがためにきたればなり 三九 耶穌あまねくガリラヤの
うちを經めぐりその會堂にてをしへ道をのべ鬼をおひ
いだせり○ 四〇 癩病のもの一人かれにきたりて曲跪ねがひ
いひけるはなんぢもし聖旨にかなふときは我をきよく
なしうべし 四一 耶穌あはれみて手をのべかれにつけて我
こゝろにかなへり潔なれと 四二 いふやいなやたちまち癩病
はなれてその人きよまり 四三 耶穌きびしくかれを戒へつゝ
いひてなにごとも人につぐるなかれたゞゆきて汝の身を祭
司にみせそのきよめられしためにモーセの命ぜしところ

のものを献て、うまろよ證據とをせといひてさりたり
五 さてこのことを大よいひつゝく
たりひろめけるば耶蘇このの
たゞ人あきところろよ居たり
うまろ

第二章

數日のち耶蘇まこ
の室にることきて區そ
ひきり門にたらべき場處さへ、もなきほどにありき。耶蘇う
まことをしく說寬ふくうまよ癩瘋とやまひするものを四人よ
うせ耶蘇にきたるまものありしう 四 群集よりて

づきこうりけるばうまめとるところの屋蓋をとりのぞ
きてちゆうふの人とねることのまつをろせり 五 耶蘇そ
の信仰をてちゆうふのひとりにいひけるは子よあんちの
罪ゆるされてう 六 數人のこゝにありしやらに坐りしが心
のうちにおもひけるは 七 この人いかゆゑにかゝる惡口をい
ふや神よあらむをしてたゞ一の罪をゆるすをえんは 八 耶蘇
たちまちにこの人がこゝろのうちにかゝることを論ずる
をみてこゝろにそのことろよいひけるはいかん
ぢうあんぞ心のうちにかゝることろんずるや 九 癩瘋の
人にあんちのつみはゆるされたりといふとおきて起てあんちの